A Reprint of "Taketomonori-gyojoki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小井土, 守敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6718

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十一号、平成三十一（二〇一九）年三月

〈翻刻〉『多気具教行状記』

小井土　守敏

【キーワード】多気具教行状記、勢州軍記、北畠具教、年代記

本稿は、稲垣泰一氏蔵『多気具教行状記』（写本）を翻刻・紹介するものである。

『多気具教行状記』は、伊勢国司北畠家第八代当主、多気（北畠）具教（享禄元年（一五二八）～天正四年（一五七六））を中心とした、伊勢国の諸家の抗争と、同国諸家が織田信長、豊臣秀吉の戦役に巻き込まれていく様を描いた年代記である。『国書総目録』では、『多気具教行状記』を『勢州軍記』の別書名としている。たしかに、『多気具教行状記』の目録を一覧するに、応仁の乱以降、秀吉による平定にいたるまでの伊勢国の争乱を描いた『勢州軍記』（『伊勢軍記』とも）と、文言の差こそあれ、多くの記事が重複している。しかし、『勢州軍記』が漢文体で記されているのに対し、『多気具教行状記』は漢字片仮名交じり文で記されており、その本文は、『勢州軍記』をそのまま訓読したものではないことは明らかである。二書の深い関係は容易に想像されるものの、その差異は、本文異同の範疇とは言えず、やはりこれらは別作品とするのが妥当であろう。こうした類書としては、他に『勢州四家記』『勢州兵乱記』『北畠物語』『勢陽軍記』等が挙げられる。

古典遺産の会編『戦国軍記事典――群雄割拠編――』（和泉書院、一九九七）には、『勢州軍記』『勢州四家記』『勢州兵乱記』が立項されているが、『多気具教行状記』についての言及はない。同事典では、『勢州兵乱記』を『勢州軍記』の抜き書きと見て、三書の作者と成立を、以下のように記している。

『勢州軍記』……作者：神戸良政（伊勢四家のうちの関氏の一族神戸氏の後裔）。成立：元和四年（一六一八）～寛永十五年（一六三八）。

『勢州四家記』…作者：神戸良政もしくはその父良房。成立：未詳。

『勢州兵乱記』…作者：神戸良政。成立：寛永十五年（一六三八）。

『多気具教行状記』は、その序文によれば、享保五年（一七二〇）十一月に、伊勢国飯野郡射和村（現三重県松阪市射和町）にて、「宗阿」なる人物が「国司家之秘書」を尋ね求めて記したものであるという。「宗阿」の系譜は不明だが、「吾々先祖之…」とあるところによれ

ば、北畠氏の末裔ということになろうか。なお、『勢州軍記』等の作者とされる神戸良政や、その成立背景とされる紀州藩主徳川頼宣の依頼云々の記述は、底本には見られない。奥書の最後に、献本先と思しき「近田與四郎」という名が見えるが、この人物についても不明である。また、奥書は序文と同じく享保五年とするが、寛永五年（一六二八）正月に書写した旨の本奥書が残る。寛永五年の書写者は「勢州一志郡多気ノ住人／松枝軒柴氏忠成」という人物である。この本奥書に従えば、『多気具教行状記』は、少なくとも『勢州兵乱記』には先行することとなる。

また、『多気具教行状記』は、随所に「私ノ評」として、二字下げによる注釈、補説を施している。もちろん『勢州軍記』には見られないものである。この「私ノ評」部分については、巻二15オ他に「享保五庚子年…」との記述が見えるので、少なくとも本奥書に見る「松枝軒柴氏忠成」によるものではない。序を記した「宗阿」によるものと考えるのが妥当であろう。随所に注解を付記する例は、『勢州四家記』にも見えるが、記された内容に『多気具教行状記』との交渉の跡はうかがえない。この「私ノ評」には、『節用集』『伊勢風土記』『太平記』『太平記綱目』『太平記大全』『太平記評判』『関ヶ原御陣』『伊勢軍記』『甲陽軍鑑』『太閤記』等の書名が見え、こうした諸書を参照しつつ本書が読まれたことがうかがわれる。また、源義朝、頼朝、義経、平忠盛、清盛、鎌田兵衛、長田庄司、曽我五郎時致、伊勢三郎義盛、シツカ（静）などに触れることから、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『曽我物語』『義経記』等の作品にも、通じていることがわかる。

『多気具教行状記』と題する伝本は、「国立国会図書館サーチ」によれば、以下の所蔵が確認される。

① 三重県立図書館蔵本　寛永元年（一六二四）［写］、一冊
② 東京国立博物館蔵本　著者 宗河（ママ）、江戸時代［写］、三冊

さらに、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」（『国書総目録』および補遺による）によると、

③ 東京国立博物館蔵本　江戸末期［写］、二巻二冊
④ 松阪市立図書館蔵本［写］、一冊
⑤ 神宮文庫蔵本　安政六年（一八五九）［写］、一冊（三冊）
⑥ 関西大学図書館蔵本　享保五年（一七二〇）［写］、『多気国司九代略』と合四冊

の四本の所蔵があるとのことである。②と③は、冊数に齟齬があるものの、同一のものを指しているのであろう。④は、当該機関に所蔵が確認できない。

現時点で、①三重県立図書館蔵本、⑤神宮文庫蔵本、⑥関西大学図書館蔵本については未調査である。

調査し得た②（③）東京国立博物館蔵本（以下、東博本）は、本稿底本と同じ本文を有する伝本であることが判明した。東博本は、幕末から明治の国学者、横山由清の蔵書印（「月の屋」）を有し、昭和十八年（一九四三）に徳川宗敬氏より東京国立博物館に寄贈されたものである。全三冊（第一冊：30丁、第二冊：31丁、第三冊：30丁）、毎半葉11行で、漢字片仮名交じり文である。灰色がかった表紙の大本（縦27・1㎝×横18・9㎝）に、外題を「多気具教行状記　一（二、三）」と直書き。保存状態は良好である。

底本と東博本の本文を比較すると、底本「於二鎮西一」を東博本「鎮西ニ於テ」と開いたり（底本巻一・6オ）、底本「垂水釈迦房〈コノホ／水ナリ〉」を東博本「垂見秋迦房〈コノホ／水ナリ〉」（底本巻一・15ウ）、底本「草生左京亮」を東博本「軍生左京亮」（底本巻一・21ウ）など、書写段階で生じるであろう本文の乱れがところどころに認められる。ただし、底本が欠く巻三目録「秀吉出世之事」の後の「北畠具親卒去之事」（底本巻三・2ウ）や、同じく底本が欠く本文中の章段名「蒲生氏郷籠城之事」（底本巻三・13ウ）については、東博本によって補うことが可能である。つまり、全体としては東博本本文は底本本文に劣るが、底本本文にも、東博本に引き継がれていない乱

れ（欠落）がある、ということである。従って、この二書は非常に近接した本文でありながら、直接的な書承関係にはない、ということが言えよう。また、奥書についても同様に書き記されている（異同は、底本「觚」を東博本「操」とすることのみ）ことから、二書ともに転写本であると判ぜられる。

ちなみに⑥関西大学図書館蔵本については、同大学図書館が公開している書誌情報を見る限り、底本や東博本に近い写本であることが推察される。「宗阿」の序を有する『多気具教行状記』が、複数回転写されているのは確実である。

かように、戦国期の伊勢国における騒乱を描く年代記・通史の類は、様々に書き起こされ、伝来したようである。彼の織田信長の進撃を阻んだ多気具教はじめ伊勢国の諸将への、後代の関心のほどがうかがわれる。これらの類書のうち、『勢州軍記』は『続群書類従』第21輯上に、『勢州四家記』は『群書類従』第20輯に、『勢州兵乱記』は『改定史籍集覧』第25冊にそれぞれ翻刻がなされている。しかし、『多気具教行状記』については、未だ翻刻された本文が提供されていないようである。この一点においてだけでも、本稿を公表する意義は認められるのではないだろうか。なお底本は、『多気具教行状記』三冊と、外題を『伊勢軍記』とする一冊の計四冊が、同じ装丁で一括されて伝存している。本稿では、紙幅の都合上、『多気具教行状記』のみを翻刻することとし、残る『伊勢軍記』一冊については、大妻女子大学人間生活文化研究所年報「人間生活文化研究　International Journal of Human Culture Studies」№29（http://journal.otsuma.ac.jp/list.html）に掲載する。併せて参照されたい。

【略書誌】

○外題　「多気具教行状記　一（二・三）」表紙に朱墨で直書。
○表紙　青鈍色卍繋ぎ表紙（原装）　28．8㎝×19．9㎝
○内題　巻一　序題　「多気具教行状記序」（宗阿述）
　目録題「多気具教行状記目録」
　巻首題「多気具教行状記巻一」
　尾題　ナシ
　巻二　目録題「多気具教行状記目録」
　巻首題「多気具教行状記巻二」
　尾題　「多気具教行状記巻二終」
　巻三　目録題「多気具教行状記巻三目録」
　巻首題「多気具教行状記巻三」
　尾題　ナシ
○丁数　巻一：27丁　巻二：26丁　巻三：24丁
○毎半葉行数　12行　○一行文字数　27～30文字程度
○料紙　楮紙　○印記等　ナシ
○その他　・朱点、朱筆による書き入れが数ヶ所認められる。朱筆による書き入れは別筆。
　・『伊勢軍記』（外題）一冊と合四冊で伝存。

【翻刻凡例】

○用字は通行の書体にあらためた。また、「ㄱ」「匕」等の合字は、「コト」「トモ」等と開いた。
○通読の便を図るために、適宜句読点を付した。
○目録、章段名、章段末尾、奥書部分以外の改行は、これを無視した。
○底本の配字に倣い、章段名は三字下げ、「私ノ評」部分は二字下げとした。
○丁代わり部分に、（　）で丁数を示した。

「多気具教行状記　一」（外題）　（表紙）
（白）　（見返し）
多気具教行状記序
宗阿述

有レ勇無ハ義君子之所レ悪ム也。雖ニ有レ勇有ト一レ義、不レ知ンハ用レ武之術ヲ、則又有ニ暴虎憑河之譏一。可レ不レ謹哉。若以ハ当国多気之国司北畠権中納言源朝臣具教卿ト申者、御運無レ拙而、尾陽織田信長公ニ被レ討給。然而頻年一志郡多気駅ニ牢士某家貸。往昔国司家之秘書所持ス。野衲旧臘馳ス二翰書一。請フ彼士秘ヲ不レ應ニ将返書一。重而再翰牢士。時ニ吾レ中国毛利家ニ仕フ。或ル年突鼻成ニ流浪身一ト。吾此ノ家ニ住ス。実ニ北畠御家之旨趣大ヒ成哉。今御居舎之為レ体金鳥玉兎良押移ル事如ニ夢幻一ノ。其明君ノ義ヲ見ルニ屡々眼目更ニ涙痕難レ止。所詮近世自ニ元和一至ニ今享保之暦一ニ。一百十余季。将ニ天下悉ク取ニ徳川ノ御治世一ニ。誠ニ四海太平四民成ルコト安穏一是レ偏ニ難在。（1オ）

東照神君之御仁恵也。天晴レ今幸ニ浴シ太平之化一ニ。重レ褥ヲ而坐シテ高レ枕ヲ臥ス。冀ハ閲ヲ是等之書ヲ。先云北畠之諸士子孫古君之奉レ重レ義ヲ、吾々先祖之忠ナラン焉。勢陽飯野郡射和村辺リニテ書ス。

時ニ
享保五年歳ノ次ル庚子一ニ仲冬穀旦写レ之
沙門宗阿子操ル二觚ヲ於勢南射水一ニ　（1オ）

多気国司ハ村上源氏也。凡源氏四流有ニ付源氏姓日本名字、源、平、藤、橘ヨリ分ル。就夫　清和源氏、村上源氏、嵯峨源氏、宇多源氏也。

源氏濫觴

清濁昇降而為レ天ト為ル地ト。在レ天ニ則日月星辰、在レ天ニ地カ則山河草木、尊卑上下シテ為リ君ト為レ臣ト。則王侯、公伯在レ臣ニ、所謂、源、平、藤、橘也。橘氏者、人王四十五代聖武天皇、以ニ葛城王一始テ為ニ橘氏一ト。藤氏者、人王三十九代天智天皇之御宇、以ニ内府鎌足大臣一始テ為ニ藤氏一ト。平氏者、人王五十九代宇多天皇之朝ニ以ニ高望王一始為ニ平氏一ト。源氏者、人王五十六代清和天皇之支流也。抑、此君者人王始神武天皇之帝祈、也。第一ノ宮貞明親王、譲位受禅有テ陽成天皇奉ル号シ。第六ノ宮中務卿正四位上貞純親王、一条桃園之宮住玉フ。御子経基、第六皇子ノ御孫タルニ依テ、以レ世六孫王ト奉レ称。御子多田満仲ヨリ相継テ右大将（2オ）頼朝公三代。

一　頼朝　頼家　実朝　天下シテ四十二年治ム　〆三代
一　頼経　頼嗣　宗尊　惟康　久明　守邦　尊雲　成良　〆八代
　　百十五年　此内北条九代執権ス
一　尊氏　義詮　義満　義持　義量　義教　義勝　義政　義尚
　　義稙　義澄　義晴　義輝　義栄　義昭　〆足利十五代
一　信長　秀信　〆織田二代　天下十年
一　秀吉　秀次　秀頼　〆三代　天正十年ヨリ元和元年　〆三十四年
一　家康公　秀忠公　家光公　家綱公　綱吉公　家宣公　家継公
　　吉宗公　元和元年ヨリ享保五年　百四年ニアマル

天下太平御治世万々歳　（2ウ）

多気具教行状記目録

伊勢ノ国分領之事
多気ノ国司之事
工藤一家之事
関ノ一党之事
北方諸侍之事
乱世根源之事
乱国大将之事
多気国司権威之事
山田合戦之事
北畠国司出張之事
長野輝伯之事
関家出張之事
田丸兵乱之事　（3オ）

徳政兵乱之事
佐々木義実之事
佐藤中務丞謀叛之事
佐藤退治之事
長野家養子之事
秋山家謀叛之事
蒲生家執権之事
関工藤家一味之事
塩浜合戦神戸城責之事
赤堀城責之事
関家出世之事
足利義昭之事
同退去之事
織田信長出世之事
滝川左近一益之事
織田信長出勢之事
神戸和睦之事
工藤一味之事
神戸養子之事

（3ウ）

（4オ）

（4ウ）

（白）

多気具教行状記巻一

伊勢国分領之事

本朝人皇ノ末、戦国ノ時ニ当テ、伊勢ノ国一国ヲ諸家凡ソ四ツニワケテ守護ス。南五郡ハ国司北畠ノ領知ナリ。北八郡ハ工藤ノ一家、関ノ一党、其外北方ノ諸士ノ領知ナリ。但シ南方渡会郡山田、三保、宇治、六郷等ハ、宇治郷五百川上鎮坐マシマス皇太神宮ノ御領知ニシテ、不二入守護一ノ地ナリ。神三郡ハ、多気、渡会、答志、以上国司方ヨリ奉行ス。其外国中諸所ニ神領多シ。昔ハ諸州ノ中ニ神戸有。是ヲ神戸ト号。大日本国ハ忝モ神宮ノ御国也。我朝ノ中国ナルニ依テ、御跡ヲ伊勢ニ垂レ給フト云リ。先以国ヲ治メ家ヲ保ツヘキ人ハ、第一神明ヲ敬可奉ナリ。

私ノ評。近代雑書ノ内ニ、節用集ニ、十五郡トアルハ十三郡ノ外ニ御座嶋、錦島ヲ入ル。尤答志郡ハ志州二郡ノ内ニアル。鳥羽本町南（5オ）二町余ニ堀ノ上ト云土橋アリ。是ヨリ北ハ伊勢ノ国ト云々。併御座島、錦島二所、十三郡ノ郡内ニ入。委細ハ山田ノ住龍ノ尚舎ト云仁、伊勢風土記ヲ可考。

多気国司之事

爰ニ、南伊勢多気国司、北畠御所ト申ハ、先祖相尋ルニ人王六十二代村上天皇第七ノ王子、具平親王ノ後胤、村上源氏久我中院共ニ一流也。幕ノ紋ハ割菱五七ノ桐ヲ用ユ。然ルニ当家ノ先祖、北畠源大納言親房卿ハ、博学宏才ニシテ後醍醐天皇ニ奉仕、足利将軍尊氏謀叛ノ比ホヒ、文武両道ヲ立、忠節ヲ尽シ玉フ。其後親房卿、和州吉野ノ皇居ニ於テ政務ヲ司リ、准后ノ宣旨ヲ蒙リ、為入道覚元ト号ス。当時国家乱、官職ノ故実ヲ失ハンコトヲ愁ヘ、職原抄ヲ撰ヒ、百官ノ式目ヲ被定、末代ノ宝書也。其嫡子奥州ノ国司北畠中納言源顕家卿、建武三（5ウ）年春、東国ヨリ攻上リ尊氏ヲ西海ヘ追下シ、無比類武名ヲ顕シ、東国ニ下リ、明ル延元二年正月、顕家卿同舎弟春日少将顕信朝臣相共ニ、大軍ヲ引具シ、重テ陸奥ヨリセメ上リ、武威ヲフルヒ忠戦ヲ遂、阿部野ニ至テ討死シ玉フ。実ニ忠臣ト云、武勇ト云、古今タメシナキ良将也。然テ舎弟顕信卿、正三位中納言鎮守府将軍ニ任シ、無程奥州新国司トナリテ下向有。後ニ上洛有、征夷将軍ノ宮ニ属シ、於二鎮西一討死也。同舎弟北畠大納言顕能卿ト号ス。則親房ノ三男也。此卿始テ伊勢ノ国司職ニ被補、伊賀、伊勢ノ間ニ於テ数年合戦ヲイトミ、雲出川ヨリ南ノ管領トシテ一志郡多気ニ居住ス。是ヲ多気ノ御所ト云。南朝正平七年ノ春、村上天皇上幸マシ〳〵シ時、顕能卿、大将軍ヲ請給リ、伊賀、伊勢両国ノ軍兵ヲ卒シ、父親房入道諸共ニ入洛シ、朝政ヲ司リ、明徳三年ノ秋、南朝断絶ノ後、顕能卿ノ子息北畠大納言顕泰卿、後小松院天皇ニ仕奉リ、安堵（6オ）ノ所領ヲ給リ、子

孫繁昌シ、其領知ハ先南方ニ於テ一志郡、飯高郡、渡会郡、多気郡、合五郡、其外和州宇多郡ヲ〆六郡ナリ。所従、凡侍九千六百人、此内馬上千二百人、小人六千四百人、合一万六千ノ大将タリ。皇家衰ヘテ後ニ、公家ノ大名ニハ此国司一人也。然ニ称光院天皇ノ御宇、応永廿二年、北畠大納言満雅卿、公方義持公ニ対シテムホンノ聞ヘアリ。依之将軍家ヨリ江州六角佐々木家、伊賀ノ仁木家、大和ノ筒井家、越知、十市、久世、満西、勢州ノ長野家、雲林院、関、神戸、峯、千種家以下ノ軍勢ニ命シテ是ヲセメ玉フ。国司大納言、要害ヲ伊勢南方ノ諸所ニカマヘテ防キ戦フ。中ニモ当国阿坂山ノ城ヲ為二本陣一敵ヲ防ク。足利公方ノ軍勢、当城ヲ落スコト不能。コヽニ於テ、高山ニ水トホシカランコトヲ察シ、四方ノ水道ヲ断テ遠攻ス。城中ニ水ナンギシ、謀ヲ廻ラシ、馬ヲ矢倉ノマヘニ立ナラヘ、柄杓ヲ持テ白米ヲ汲、是ヲ洗、敵ヲアサムク。寄手、実ニ水アリト思ヒ、シハラク（6ウ）退陣ス。程ナク公方家、国司家ト和睦シ玉フテ無事ニナル。此ユヘニ、北畠ノ本領無恙、ソレヨリ次第ニ当家繁昌ス。先北畠家ノ一類ハ、木造ノ御所、或ハ油小路ト号ス。是ハ北畠顕能ノ次男、正三位顕俊卿元祖也。此卿、後小松院ヘ仕ヘ奉、一志郡木造ニ居住シ、国司ノ与力トシ、其領知同郡ニアリ。凡侍六百人、馬上百騎、小人四百人、都合一千ノ大将ナリ。外ニ北畠ノ一族、三大将アリ。多気郡田丸ノ御所、飯高郡大河内ノ御所、同郡坂内ノ御所等也。各々国司家ノ幕下トス。諸郡ノ内ニ与力、被官有。三家共ニ、凡侍六百人、内馬上百騎、小者人四百人、合一千ノ大将ナリ。并ニ一族ノ大将ハ、一志郡波瀬ノ御所、同郡岩内ノ御所、同郡藤方ノ御所等也。皆国司ノ旗下トシテ、諸郡ノ内ニ与力、被官アリ。三家共ニ、凡侍三百人、内馬上五十騎、小人二百五十人、都合五百人、一族ノ勢五千人、両奥ノ山勢一千人、并和州宇多ノ三家ハ、沢、秋山、芳野等也。此三家ハ、往昔吉野ノ天子ノ侍ナリ。（7オ）北畠ノ与力トナル。各勢州ニ於テ与力、被官有。是等ノ衆ハ国司家ノ先陣ナリ。沢ノ幕ノ紋、井筒ナリ。凡一千ノ大将ナリ。秋山家ノ幕ノ紋ハ楓ナリ。是モ一千ノ将ソカシ。芳野家ノ幕ノ紋、藤ノ丸、凡五百ノ大将也。三家ノ勢、都合二千五百人ノ家僕トス。又、多気ノ近習、合五千人、其外二千五百人、鳥屋尾、水谷ヲ以テ大将国司ノ家臣トス。沢、秋山、鳥屋尾、水谷等ヲ四管領ト称シテ、国司ノ家人ノ内、威名コトニ重シ。

工藤一家之事

北伊勢工藤ノ家ハ、鎌倉殿ノ侍、伊豆ノ国ノ住人、工藤左衛門尉藤原祐経カ後胤ニテ、幕ノ紋、木瓜并三引龍也。中祖工藤次郎左衛門尉親光、元弘元年ニ初テ当国安濃郡長野ヲ給フ。同三年、北条家滅亡後、長野ニ居住シテ長野家ト称ス。夫ヨリ尊氏卿ニ仕、守護ノ手下ニ属ス。延元五年ノ秋、当国ノ守護、仁木右京大夫源義長、謀叛ヲ企、長野ニ楯篭合戦（7ウ）ヲハケム。此時義長、又、仁木三郎、石堂刑部太輔頼房両人ヲ大将トシテ、伊賀、伊勢ノ軍兵ヲ相添、江州カツラ木山ニ打出、同九月廿八日、佐々木六角判官入道崇永ト合戦シ、仁木敗軍セシ時、勢州ノ軍士矢野下野守、工藤判官、宇野郡ノ後藤弾正忠、波多野七郎左衛門、佐脇三川守、高嶋次郎左衛門、其外宗徒ノ士、悉討死ス。其後南方ノ一味ト成テ、五六年当所ニ篭城ス。六角并土岐大膳大夫入道善忠等、是ヲ攻。伊勢ノ住人、普ク仁木ニ背、将軍ノ味方ニ参、忠節ヲハケマス。仁木是非ナク降参シテ、北畠国司家ノ押ヘトナル。伊州ヲ給フ。此節、長野家モ又将軍ニ仕テ、国司ノ押ヘト成ル。安濃、庵芸両郡ヲ給ハリ、子孫繁昌ス。扨、工藤両家督トハ、安濃郡長野家其一人也。是則工藤ノ大将タリ。庵芸郡雲林院家其二人也。各安濃、庵芸両郡ノ中ニ於テ領知アリ。両家トモニ凡侍六百人、内馬上百騎、小人四百人、都合一千ノ大将也。其外ノ一家ハ、安濃郡草生家、同郡宗所并細野、分部家等、各々（8オ）長野家ノ与力トシテ、安濃、庵芸ノ中ニ於テ領知有。彼等凡侍三百人、内馬上五十騎、小人弐百人、合五百ノ大将也。外ニ長野ノ与力、乙部家ト云ハ、源三位頼政ノ末孫ナリ。又三宅、三間、中尾、川北等、合一千人以上、工藤勢五千人ナリ。

関ノ一党之事

平相国太政大臣清盛公ノ後胤、幕ノ紋、挙羽ノ蝶ナリ。関家ノ先祖、小松内大臣平重盛公ノ天下執権ノ比、次男小松新三位中将資盛卿、十三才ニテ殿下乗合ノ無礼有シヲ、父公大キニ憤リ、忽伊勢国鈴鹿郡関谷久我ノ庄ニ流シ給フ。資盛配所ニテ六年ノ春秋ヲ送ル。元来伊賀、伊勢両州ハ、平家重代ノ領知ナレハ、二州ノ住人、平氏ノ一族并諸侍、是ヲ賞翫スルコト不斜。其間ニ資盛、子息一人儲ケラル。後ニ盛国ト号ス。然シテ資盛十八歳ノ時、帰洛セラレ、文治元年三月、ツヰニ西海ニ於テ討死セラル。是ヨリ（8ウ）先、寿永三年八月、伊賀、伊勢ノ平氏等謀反ノ後、盛国深ク勢州ニ蟄居ス。右大将頼朝公、天下ヲ随ヘ玉フ後、北条時政上洛シテ、平家ノ余類尋出シ、悉ク討セリ。但、頼朝公、小松殿ヘノ為「報恩」、其子孫ヲ助玉フ。故ニ盛国ヲ北条家ニ被」預、建仁四年四月、又伊賀、伊勢ノ平氏等ムホンノ頃ホヒ、盛国ノ嫡子関左近大夫実忠、初テ勢州関ノ谷ヲ玉ハリ、関家ト称ス。則北条家ノ与力ト成テ鎌倉ニ居住ス。同舎弟平三郎左衛門尉盛綱ハ、北条家ノ執事トナル。其後北条、天下執権ノトキ、盛綱初テ管領トス。是則北条家ノ内管領、長崎家ノ先祖也。関家ノ子孫、長崎家ノ一族トシテ、東国ニ居住ス。元弘三年五月、高時滅亡ノ後、実忠六世ノ孫、関四郎、関東ヨリ勢州関ノ谷ニ上着シテ、亀山ニ居住ス。古ヘ主君タリシ好身ヲ以テ、近隣ノ諸士、是ヲ敬フ。其後尊氏卿ノ治世ニ及テ、守護ノ手ニ属ス。子息数多出生ス。元来関家ハ富人也。故ニ嫡子、神戸ニ居住ス。後ニ法名柏岩ト称ス。（9オ）次男ヲ国府ニ居ヲキ、一人ハ亀山ノ家督ヲユツリ、一人ハ鹿伏兎ニスエ、一人ハ峯ニスエヲキ、其外諸方ニ子孫ヲ在付ヲク。然ル処ニ、仁木右京大夫義長謀反ノ節、関ノ一族皆忠功ヲハケマシ将軍ニ仕。鈴鹿郡亀山ノ関家其一人、是関家ノ惣領タリ。河曲郡神戸家其二人。鈴鹿郡峯家其三人也。何」モ足利家ノ侍トナリ、三家共ニ領知廿四郷、凡侍六百人、内馬上百騎、小人四百人、合一千ノ大将也。同五大将ハ、鈴鹿郡国府家其四人也。同郡鹿伏兎家其五人ナリ。各足利家ニ属シ、両家共ニ領知十二郷、其内国府一郷ハ庵芸郡ノ白子也。鹿伏兎家一郷ハ朝明郡ノ富田也。凡侍三百人、内馬上五十騎、小人二百人、都合五百ノ大将也。其外五家ノ与力、合千人以上、関家ノ与力、軍勢五千人ト也。

北方諸侍之事

勢州北方之諸士ハ、昔源平治世以後、北条、足利ノ代々領知ヲ玉フ人々也。（9ウ）先三重郡ノ千草家、是一千ノ大将也。同郡宇野部後藤家、是一千ノ大将也。則後藤兵衛尉実基カ末葉也。幕ノ紋ハ木瓜也。同郡ノ赤堀家、是ハ蒲生武蔵守藤原秀郷ノ後胤也。同郡橘家、是五百ノ大将也。庵芸郡稲生家、是守屋大臣ノ後胤、和田九郎カ末孫、幕ノ紋ハ丸ノ内ニ鷹ノ羽三本扇ノ丸也。朝明郡ノ南部家、是新羅三郎源義光ノ後胤、幕ノ紋ハ藤ノ丸鶴ノ丸也。同郡加用家、梅津家、富田家、此等ハ伊勢平氏富田進士家スケカ後胤、同郡ノ浜田家、員弁郡ノ上木家、同郡白瀬家、同郡ノ高松家、桑名郡ノ持福家、是等ハ余五将軍平維茂ノ後胤、幕ノ紋ハ二引両也。同郡ノ木股家以下、北方ノ諸士、都合四十八家有。各足利家ノ侍トシテ一味同意スル者也。

乱世根源之事

足利将軍尊氏卿五代ノ後胤、慈照院源義政公、世務無道ニ依テ、管領（10オ）細川右京大夫勝元ト、其舅山名入道宗全ト、互ニ威ヲ諍ヒ、人皇百六代後奈良院ノ御宇、応仁元年五月廿六日、初テ京都ニ合戦ヲ挑ム。天下ノ諸家、両方ニ分テ是ニ与力ス。此時伊勢国関長門守ハ細川家ノ一味タリ。同国関家、備前ノ国勝田等、三条殿ノ御所ヲ堅メ、長野其外勢州ノ住人等、相国寺ノ東門ヲ警固ス。同・国司北畠大納言教具卿ハ、皇家ヲ守護スル故、又是ニ与力ス。夫ヨリ兵乱更ニ不止、十一年ヘテ文明九年十一月、山名宗全終ニ滅亡ス。然リト云ヘトモ山名一味ノ諸家諸国ヘ落下リ、時々義兵ヲ起シ、細川一味ノ諸士ヲ退治ノ為、諸方ニ進発ス。挑戦是ヨリ大乱打続、王法ヲ恐レス武命ニ不随、日本国中皆私ニ弓矢ヲトリ、ホシイマヽニ国郡ヲ諍ヒ、或ハ主君ヲ殺シ、父子戦ヒ兄弟朋友等ヲ害シテ、其所領ヲウハワントス。悲哉、本朝此時ニ至、君臣ノ礼義ヲ失ヒ、官職ノ式法ヲ乱ル。運有者ハ匹夫モ国主トナリ、運ヲ失フ輩ハ貴人モ下賤トナル。コノユヘニ、武威ヲ以

出世ノ諸士（10ウ）アマタ有。就中細川勝元カ子、右京大夫政元、威ヲ逞シクシテ公方ニ背キ、武将ヲ以度々江州ヘ進下ス。然リト云ヘトモ其子武蔵守高国カ時ニ当テ、終ニ其家門滅亡ス。

乱国大将之事

凡乱国ニ依テ日本国中ニ出世ノ侍多シ。畿内ニ於テハ、先京都ニ三好修理大夫源長慶、公方ノ執権ニ被定。是元来阿州ノ住人ニテ細川家ノ人也。武運ニ乗シテ権ヲトル。自然ニ出世シテ公方ノ後見トナル。東国ニテハ江州ニ佐々木ノ両家、六角、京極等、其威ヲ近国ニ振フ。浅井入道休外、其子下野守久政、其子備前守長政父子三代、勇威ヲ江北ニ轟ス。美濃国ニハ斎藤山城守入道道三、近隣ヲ随ヘテ武威アリ。是元ハ山城国西ノ岡ノ住人也。濃州ニ下向シテ自然ニ出世ス。伊勢国ニ北畠多気国司、尾州織田家、是又家門大ニ繁昌ス。駿河国ニ今川上総介源義元、隣国ニ威名アリ。甲州ニ武田晴信入道信玄、（11オ）武威ヲ数国ニ振ヒ、先信州小笠原長時、村上義清、諏訪頼茂、其外諸家ヲ亡シ、後ニ駿州今川氏真ヲ亡ス。関東ニ於テ上杉禅秀、鎌倉ノ持氏ヲ亡シ、古川ノ成氏ト戦シ後、上杉家、鎌倉ノ執権トナル。夫ヨリ後、伊勢平氏新九郎氏茂、伊豆国ニ下向シ、北条早雲ト号ス。其子氏綱、其次氏康、武名弥輝シ、相州小田原ニ下リ居住ス。然テ東国ヲ退治スル故、千葉、三浦、小山、結城、佐竹、那須、宇都宮、里見、大館以下、皆是ニ属ス。

私ノ評。北条早雲ト申ハ、初テ東国武者修行ニ出ル、勢州射和多気屋ト申者、六代先祖也。伊勢新九郎ト云シ者也。人数六人同道ニテ下ル。凡ソ伊勢国ヨリ名アル人出ル也。玉川ト云本名也。奥州ニ会津ノ芦名盛成、武威ヲ諸方ニ振フ。白川ノ結城家、岩瀬ノ二階堂家、二本松ノ津川等、是ニ属ス。故ニ田村、岩城、相馬、同シク一味ス。同ク伊達晴宗、南部等、権威ヲタクマシクシ、子孫各繁昌也。出羽国ニハ山県家、勇（11ウ）威ヲ振フ。北国ニハ越前ニ朝倉入道永村、越後ノ国ニ長尾輝虎、何モ武勇遠近ニ振フ。中国ニ於テハ周防国ニ大内大納言義隆、累代家門栄テ、諸侍頭ヲ傾ク。然ルニ家臣陶五郎隆房、逆心ニ依テ大内終ニ滅亡ス。出雲国ニ尼子経久カ子孫、京極家ノ一族トシテ、威ヲ中国ニ振フ。芸州ニハ毛利元就、其子隆元、自然ニ出世シ中国一統ニ治ム。伊与国ニハ河野家、其威ヲ国中ニ振ヒ、土佐ノ国ニ長曽我部土佐守、元来細川家ノ侍トシテ武功ヲハケマス。西国ニ於テ豊後ニ大友一家、武勇ヲ近国ニ振ヒ、肥前国ニ竜造寺隆信、武功ヲ以出世ス。薩摩守義久、薩州ニテ数代、武威ヲ逞シ、此ユヘニ菊池、小弐、松浦等、次第ニ威ヲ失フ。如此ニ国郡悉乱レ、大水フセキカタク大火消シカタシ。何レノ日、兵乱治ルヘキトモミヘス。浅間シキ世ノ中也。

私ノ評。此節家康公、参州岡崎ニ御居城アリシ也。

多気国司権威之事

（12オ）

諸国大乱ノ比ホヒ、伊勢ノ国々司北畠政具卿ノ子息材親卿、権威殊ニ重シ。爰ニ北伊勢、神戸柏岩ノ五代ノ後胤、神戸下総守ハ、前北畠権大納言教具卿ノ聟也。又長野家ハ女子有テ男子ナシ。故ニ政具ノ末子ヲ養子聟トシテ、神戸四郎具盛ト号ス。後ニハ神戸蔵人ト云テ文武達人ナリ。一類是ヲ妬ミ、并家中ノ士、是ニ逆意ス。サレトモ具盛ハ仁義ヲ以テ家ヲ治ム。殊ニ南方ハ一家也。長野ハシタシキ故、其家ヲヨクス。入道ノ後法名ヲ楽三ト号ス。北方ニ於テ武威ヲ振フ。次男ヲ以赤堀家ノ養子トシ、楠家ヲ以聟トス。此故ニ彼両家、神戸ト一味也。依テ国司材親卿、長野、神戸、楠、赤堀等、皆同意ス。大石ノ御所ト申ハ是也。

乱国敵対之事

人王百六代、後奈良院ノ御宇、武将足利殿衰世ノ頃、天文年中、諸国ノ兵乱シハラクモ不止。近国隣郷悉ク戦フ也。此時多気ノ御所ハ東方志摩（12ウ）ニ向テ戦ヒ、南方大和国ニ向ヒ、吉野、宇知郡、并紀州熊野山ト戦フ。西方伊賀ニ向ヒ仁木ト戦ヒ、北方工藤家ニ向テ戦フ。又工藤ハ南方国司ト戦ヒ、関家ハ工藤家ト戦ヒ、西方近江国六角家ニ向テ戦ヒ、北方諸士ト戦ヒ、北方ハ東方尾張ニ向テ織田家ト戦ヒ、南方関家ニ相向テ戦ヒ、北方斎藤家ニ向美濃ト戦ヒ、加之日本国中皆如

斯。其前ヲ防ントスレハ其後ニ敵アリ。其右ヲオソハントスレハ其左ニ敵アリ。爰ヲ以諸士、一日片時心ヲ不レ安、只甲冑ヲ帯シ刀剣ヲ握ルヨリ外、サラニ他事ナシ。

山田合戦之事

乱世ニ至テ、勢州渡会郡神領モ又祢宜神主等、私ニ弓矢ヲ取テ、宇治ト山田ト合戦スルコト数度也。神領ハ兼テ国司ヨリ奉行スル所ニ、其頃神職等、聊国司ノ命ニ不随。爰ニ山田ノ住人、村山掃部亮某、武威ヲ神領ニ振ヒ、大剛ノ勇士也。同ク国司ノ命ヲ背キ、大ニ乱逆ス也。三郡（神本ノマヽ）宇治、山田、添、川崎、朝（13オ）熊、二見ノ諸勢ヲ催シ、既ニ国中ヘ打出ントス。此勇勢ヲミテ、堤、上部、春木、久志本、龍、福井、益、三日市、福島、其外多クノ諸士、同意蜂起ス。此ユヘニ天文三年正月廿日、国司北畠晴具卿、南方ノ諸軍勢ニ下知シテ、神領ヲ攻ラル。宇治、山田ノ諸勢ハ、宮川ノ東川原ニ陣ヲ取、大綱ヲ川中ヘ流シカケテ防キ戦フ。国司勢、川キシニ進ミ時ヲ作リ、矢ヲ合セ戦ニ及フ。先陣沢、秋山スヽンテ宮川ヲ押渡リ、一同ニ攻立ル。宇治、山田ノ軍士、タマリ兼テ敗軍シケレハ、掃部介頓テ太神宮ノ拝殿ニカケ入、腹十文字ニ掻切、腸ヲツカミ出シ、宮中ニ火ヲ放ツテ自殺ス。悪名悪逆ノ所行、自滅スルコト速ナリ。此後天下ニ疫病オコリ、人多ク死スルユヘニ、太神宮ヘ勅使ヲ被立、并ニ村山ヲ神ニ祭リ玉ヘハ、悪病イツシカ静リ、又去ル頃、長官渡会ノ経政ト云者、神道ノ根源ヲ究メ聖賢ノ道徳ヲ兼、又此ユヘニ諸人ヲ憐ミ物忌ノ禁火ヲ私ニ其大概ヲ免ス。神官等大ニ憤リ、奏問ヲヘテ常政ヲ流罪セシメントス。其時神前ニ木ノ（13ウ）葉ノ虫喰アリ。是ヲ読テミレハウタナリ。

常政ヲツネニミルタニ恋シキニナンソヘタテン神垣ノ内

ケヤウ（カ）ノフシキヲミレトモ、神官等サラニ用ヒス。ツヰニ奏聞ニ及フトキ、主上ノ御前ニモ同シク虫喰アリ。聖主アヤシク思召、流罪ヲ免シ、常政老後ニハ衣冠引繕、参宮ノ道路ニテ自然ニ天上シテ、空中ヲ歩ミ行シカ、漸々トシテ消失ヌ。実ニ難有長官也。今度村山カ一揆ヲ北畠退治セシカ然ルヘケレトモ、又神慮ヲ憚ラサル所有ハ、家門ノ滅亡遠カラシト、世挙テ沙汰シアヘリ。其後、神領ノ残党、二見ノ浦ニ陣スト聞ヘキ。国司ノ軍勢馳向テ合戦シ、終ニ悉攻干ケリ。

私ノ評。人王三十九代天智天皇即位十辛未年十二月三日、江州山科ニ於テ天ヘアカリ玉ヒ、御クツハカリノコル。其所御陵ヲ建ツ。又日、南都東大寺釈法蔵天ニアカリ玉フ。然トモツネマサ長官天上ハ末世トハ申セトモアリカタキ。（14オ）

北畠国司出張之事

勢南ノ多気国司ハ、武勇ヲ隣国ニ振ヒ、次第ニ近辺ノ諸郡、諸士、其幕下ニ属ス。先東方ハ志州鳥羽ノ城ヲ攻シタカヘ、其外二郡ノ諸士、小浜、安楽、嶋津、的屋、相差、国府、甲斐、浪切以下ノ輩、是ニ随フ。南方大和国、久世、満西、常ニ国司ト防戦ス。并紀州熊野山、尾鷲、新宮ノ侍トモ、国司方ニ附。西方ハ伊賀四郡共ニ仁木領分也。然トモ、名張、阿賀二郡ノ諸士ハ、国司ニ随フ。扨北方、工藤方ヲ討ンタメニ、木造、藤方ノ両御所、奥ノ山寺ヲ以是ヲ押ヘ、或時ハ乙部陣アリ、或トキハ田上陣アリ、又或時ハ細野、長野ノ城ヲ責、数年合戦止コトナシ。

私ノ評。田上トハ津ヨリ一リ半西ニ有。乙部トハ今ノ寺町後也。爰ニ乙部兵庫頭藤政ノ城アト有。今藤堂某ノ下屋鋪ノ北ニ有。

長野輝伯之事

其頃、長野輝伯ト聞ヘシハ、故長野家ノ末子ナリ。彼舎兄長野三郎ハ其節（14ウ）京都普光院ニ仕ヘテ近習タリ。或トキ公方ノ近臣伊勢守某、

私ノ評。普光院ハ足利家六代大将軍源義教ノコト也。伊勢守トハ仁木伊勢守事也。

御所ニ来リテ鞠ヲ興ス。暫有テ、足ヲ洗ヒ明衣ヲ乞ケルニ、長野三郎有合テ、明衣ヲ持来リテ、伊勢守ニワタサントス。其トキ伊勢守、一礼ヲモ不述、是足ヲヌクヘト云テ投出ス。三郎大ニ腹ヲ立、太刀ヲヌキテ伊セ守ヲ切コロシ、其身モ自害ス。生年十六歳也。其舎弟源次郎輝伯、長野家ヲツキ、武道ノ達人也。後ニ大和守藤定ト改名ス。諸方

ニ向テ挑戦フ。天文年中、長野輝伯、工藤勢ヲ卒シ、南方ニ向ヒ、国司ト戦フトキニ、工藤勢、七備ヲマウケ、細野、分部等、一番ニ責掛リ、一日ノ内七度鎗ヲ合、勝負決セスシテ南北ニ引退ク。長野毎度利ヲ得タリ。中ニモ河内武者、殊ニスクレテ赤装束シテ馳カヽル。面ヲ合スル敵ナシ。角テ南方ノ先手崩掛リ、旗本アヤウキ所ニ、小森上野城主、（15オ）奥山左馬允、踏留テ敵ヲ突クツシ、手勢枕ヲ並テ討死。スハ黒煙立ト云ヒハヤス。国司方ニ家木主水佐、富田五郎右衛門、垂水釈迦房（コノ垂水ナリ）抔ノ勇士、七度抜群ノ高名ス。鷺山トハ是ノ合戦ノコト也。

私ノ評。鷺山ト申ハ、津ヨリ一リ、南垂見村天神山ノ西三町ニ在之。津下也。

関家出張之事

勢北ノ関一党、又猛威ヲ諸郡ニ振フ。関下野守ハ雲林院表ニ打出、数度ノ合戦ヲハケム。神戸、悦岩ト楠、赤堀ハ、一味シテ北方ノ諸侍ヲセム。其外一党、共ニ武威ニツノル。依之諸士数多彼幕下ニ属ス。然トモ、関、神戸、峯三家ノ一族不快ニシテ、互ニ権威ヲアラソヒ、度々合戦ニ及故、未出世ノ大将ナシ。

田丸兵乱之事

天文年中、南方田丸家ノ侍、山岡ト池山伊賀守ト逆心ヲ企、田丸ノ御所ヲ（15ウ）セムル。田丸弾正少弼、防戦スト云ヘトモ、難義ニ及ヒ、弾正終ニ自害セシム。是ニ依テ北畠晴具卿、大軍ヲ引具シ田丸ニ発向シ、山岡一党、山上ノ城ニタテコモル。合戦スト云ヘトモ、難義利無シテ、終ニ滅亡ス。然者、国司、少弼ノ子息ヲ立テ、田丸ノ御所トス。其後、稲葉兵庫頭ニ当城ヲ給フトキ、彼少弼荒人神トナツテ祟リヲナス故、神ニ祭リ社ヲ一宇営、尊敬ス。

私ノ評。田丸弾正神ニ祭リシ宮、今田丸ノ西ノ山ニ有之。

徳政兵乱之事

弘治元年十二月、飯高郡鎌田ノ住人豊田五郎右衛門、多気ノ郡斎宮ノ住人野呂三郎兵衛等、勢南在々ノ溢者其（トモ）、数百人一同シテ、借物ヲ破ラン為ニ、徳政ノ乱ヲ発ス。既ニ一味ノ輩馳集リ、貝ヲ吹立、鯢波ヲ作リ、所々ヲ焼立、斎宮ノ城ニ取篭。南方ノ諸侍、行向テ是ヲセムル所ニ、又豊田カ一族、平生ノ智積寺ハ大河内ノ与力トシテ、其党類ニアラス。折節留守ナリケレハ、（16オ）豊田頓テ智積寺ノ女房ヲ人質ニ捕ヘ防戦フ。南方ノ軍士、各馳集テ責動ス。彼豊田ハ、先年小森上野ノ城ニ於テ七度ノ鎗ヲ付合、大剛ノ勇士也。然トモ難遁シテ切テ出、寄手ヲ追廻ス処ニ、舟江ノ本田美作守カ家士、中西清右衛門渡合、豊田終ニ討死ス。是元小利ヲムサホツテ、大失ヲ不知。ワツカノ利欲ニホタサレテ身ヲ亡ス。凡悪逆ヲ先トシテ非法ノ謀ヲ廻ラス時ハ、必滅却スル者也ト古人申伝ヘシ。

佐々木義実出張之事

弘治年中、江州六角左京大夫源義実（佐々木ナリ）、伊勢ノ国ヲ謀ント欲シ、家長ノ小倉三河守ヲ大将トシ、三千余騎ヲ差添、勢州ヘ遣ス。カノ義実ハ、人王五十九代宇多天皇ノ後胤、佐々木源三秀義カ嫡流ニシテ、数代近江ノ国管領タリ。武威逞ク家人数多扶持シケレハ、事ニフレテ不足ナシ。既ニ小倉三河守軍勢ヲ引具シ、勢州ニ発向シテ、先千草ノ城ヲ責ム。千草家、武勇ヲ励（16ウ）マシ防戦フ。依之、良久ク勝負ヲ決セス。此戦ヒ、敵味方ハナヤカニ働ケレハ、江州ノ住人、千草ノ城ノ様体ヲ今様ニ作リ謡フ。其後義実智慮ヲ以和睦ヲ調ヘ、六角家ノ執権後藤但馬守秀勝カ舎弟ヲ以千草家ノ養子ト定、千草三郎左衛門尉ト号ス。彼後藤ハ、後藤兵衛尉実基カ末葉、播州ノ住人後藤三郎左衛門尉基明カ嫡孫ニテ、当時六角家ノ第一ノ臣下也。此時千草家ヨリ佐々木六角ヘ使者ヲ遣ス。義実対面シ、問テ云、千草家ハ凡何程ノ大将ソヤ。答テ曰、一千五十ノ大将也ト云。使者帰国ノ後、此趣ヲ語ル。千草問テ曰、汝五十ヲ加ルコトハ何ソヤ。使者答、五十ヲ加ヲ以、敵慥ニ其千ヲワスレス。主人甚感ス。夫ヨリ千草家、六角ト一味ス。小倉三州ハ千草家ニ便リ、三重、朝明ノ両郡ヲ責、并ニ西方ノ諸士ヲ攻ル故、宇野郡ノ後藤、朝明郡ノ加用以下ノ諸侍、自然ニ六角ノ手下ニ属ス。

佐藤中務謀叛之事　（17オ）

弘治三年三月、江州ノ軍勢三重郡柿ノ城ヲセム。此柿方ハ神戸ト一味ナリ。者（テイレハ）神戸下総守一千余騎ヲ引具シ、同廿八日、柿カ城ノ後詰ス。其夜神戸家ノ家老、鬼神岡ノ城主佐藤中務丞父子謀反ヲ企、一族若侍数百人ヲ催シ、小倉ト心ヲ合、ツヰニ神戸ノ城ヲ取テ小倉ヲ引入、城ヲ守ル。神戸常々帰一（本ノマヽ）ヲ帰ミス、諸事無用心故、禍来事如斯。既ニ度ニ迷フ処ニ、佐藤カ家人、古市与介ト云者、主人ニ背キ神戸ト一味シテ、鬼神岡ノ城ヲ取、又神戸家ヲ引入。神戸大ニ悦ヒ、智謀ヲ廻ラシ小倉ヲ討ント欲ス。

佐藤中務退治小倉之事

近キ頃、神戸家ト関家ト不和ニナル故、神戸、今度助カリ、関家ヲ頼ム事不能、長野家ニタヨリテ加勢ヲ乞。長野頓テ同意シ、工藤勢ヲ引具シ、鬼神岡ニ馳来ル。神戸家、長野家ヲ合、直ニ神戸ノ城ニ取掛ル。小倉参河守、粉骨ヲ尽シ防戦フト云ヘトモ、寄手勇進シテ向ニヨリ、ツヰニ利ヲ失ヒ、（17ウ）開城シテ千草ニ引退ク。神戸進ンテ悉ク敵ヲ追討シ、二度ヒ本城ニ入テ、会稽ノ恥ヲ雪キケル。古書ニ曰、夫主君ニ敵スル者ハ、天罰ノカレカタシ、終ニ身ヲ亡ト云々。佐藤父子、所宮ニカクレ居タリシニ、神戸家ヨリ赦免ト称シ召寄テ、既ニ登城ニ及トキ、路次ニ人ヲ伏置テ、速ニ佐藤父子ヲ誅シ、其死骸ヲコモニマキ三日市場ニ捨置処ニ、昔佐藤カ召遣ヒシ下人来テ、件ノ死カイヲミテ、怒テ曰、汝無道ニシテ主君ニ背キ、罪ナキ我ヲ悪ム、看ヨ〳〵、端的ニ冥罰ヲ蒙トイヒ、足ヲ上テ死カイヲフム。此者フシキヤ、忽脚気ヲ病出シ、一生ノ内足不叶居去乞（イサリコヒ）ス。彼是業報ノ果ス処、実浅間シキ次第ナリ。

私ノ評。因果所感一業因難遁。昔ハ車輪メクル。在世ノ今、銭ノ輪ヲメクルハイソ。針ノミズマワスヨリ報也。善根ノ因ハ仏縁ノ種、悪心因ハ堕獄ノ縁ヲフルヘシ。可謹。　（18オ）

小倉三州ハ、市原ノ出湯ニ至テ一揆ノ者トモト口論ヲ致シケルカ、ツヰニ土民ノ為ニ討トラレヌ。古書ニ曰、夫運ハ天ニ有、死ハ定ル、敵ニ向テ退クコトナカレト云々。三河守、初ハ勢州ニ於テ大事ヲノカレ、今将ニ土民ノ手ニカヽリテ身ヲ亡サントハ思ヒ設ヌ事トモナリ。凡喧嘩ニイキホヒニツノル者ハ、其モト人ヲアナトル故也。任二血気一テ人ヲイカル者ハ、是大兵ニアラス。和ヲ用ルトキハ、家名ヲ失ハスト古語ニモアリ。強テ人ヲアナトル、又ハ怒ルハ武名ヲ失モト也。此人ハ、江州佐久良ノ城主小倉兵庫頭カ子也。佐々木家ニ於テ武勇ノキコヘアリケレハ今度ノ討手ノ大将トスル也。

長野家養子之事

多気国司北畠源大納言具教卿ハ、其威勢既ニ大ニハヒコリ、伊州、勢州、和州、紀州、志州五ヶ国ニオホフ。数ヶ所ヨリ国司ノ旗下ニツクトカヤ。此ユヘニ、北方工藤家ト度々合戦ニ及フ。爰ニ長野家ニ実子無之ニ付、永（18ウ）禄ノ初ノ頃、南北和タン調ヒ、国司家ノ次男ヲ養子トシテ、長野次郎ト号ス。然ハ工藤家南方ト一味トナリ、養父長野大和守藤定、永禄五年五月五日死去セラレ、法名浄本居士ト号ス。此故ニ国司弥権威高クシ、兼テ勢北ヲ不残討シイタカヘント欲シ玉フ。

私ノ評。長野谷ハ津ヨリ六リ、伊州道也。浄照寺中ニ浄本居士長野家位牌有。山ニ石塔アマタ有。城アト村ノ西十余町余、左ノ山半ニ有。右ノ寺一身田下領知。津下久居ヨリ四リ。

秋山家謀叛之事

北畠家ノ侍ニ、大和ノ宇多ノ三家、沢、秋山不快ニシテ、ヤヽモスレハ私ニ軍ヲ興シ、国司ノ政道サラニ不用。中ニモ秋山入道宗舟カ子トモ秋山藤次郎ハ、三好家ノ聟トシテ威光重ク、殊更大剛ノ勇士也。故ニ武威ヲ国中ニフルヒ、毎々国司ノ命ヲ背ク。依之永禄年中、国司伊勢士ニ下知（19オ）有テ、和州神楽岡ノ城ニ押寄、攻戦フ。初度ノ合戦ニ、安保大蔵太輔、磯田彦右衛門、先掛高名ス。兼テ此両人、同死ノ約有。退クトキハ敵シタヒキテ、馬上ニオヰテ磯田ト組。未タ地ニ落サル以前、刀ヲヌイテ磯田敵ヲ突伏、押ヘテ首ヲ取ントスル折カラ、敵下ヨリ刀ヲ以、磯田カ首ヲ過半カキテハネカヘシケル。磯田ス

テニアヤウキ所ヲ、安保ハルカニ是ヲミツケ、内々ノ約ヲ思ヒ出シ、走リ来リ敵ヲツヰニ討。我所持スル手ヌクヒニテ磯田彦右衛門カ首ヲマキ、馬ニイタキノセ、諸共ニ引返ス。誠ニ義心ノ深チキリナリ。其以後、磯田疵イエテ、首少マカレル、右ノイハレナリ。其後、秋山家和タンヲト、ノヘ、親父宗舟ヲ以、国司家ヘ人質ニ出ス。北畠ヨリ、宗舟ヲ大内山但馬守ヘアツケラル。終ニ宗舟カシコニテ卒去セリ。秋山藤次郎、同遠州モ程ナク死去セリ。舎弟次郎、其跡相続シ、秋山右近将監ニ任シ、滝川伊与守カ聟トナレリ。（19ウ）

私ノ評。沢隼人佐子孫隼人、元和年中、摂州浪華御陣ヨリ、藤堂和泉守高虎ノ倍臣トナリ、大阪表首尾克禄二千石被下候。三代ノ子孫隼人千五百石、舎弟沢孫右衛門五百石被下。隼人病死女子一人即刻病死。隼人妹ノ子五百石被下。其子相果、今ノ隼人廿人扶持被下候。秋山家江府御旗本秋山十右衛門五千五百石被下。

蒲生執権之事

江州蒲生郡日野ノ城主蒲生下野守定秀ト申ハ、武蔵守秀郷ノ後胤ナリ。幕ノ紋ハ立鶴也。元来足利公方家ノ侍トシテ一千余騎ノ大将ナリシカ、近頃ユヘ有テ蒲生ハシハラク六角家ノ手ニシタカヒケル。定秀ハ武道達人ナレハ、数ヶ度ノ軍功ヲ以、彼家ノ執権トナリ、兼テ勢州ヲ討シタカヘント欲スル所ニ、小倉三州遮テ勢州ニ発向シケレハ、蒲生カレカ功ヲ悪ミ、小倉三河守カ領内ニ押寄、民屋悉ク放火ス。（20オ）此時日野ノ住人、蒲生殿ハ百廿八郷、小倉与力ハ伊セハカリ、ト今様ノ小歌ニトリ〳〵ウタヒハヤシケルト云々。小倉既ニ滅亡ノ後、定秀弥智謀ヲメクラシ、勢州ヲ謀トラン為、先ッ一党ノ大将関安芸守盛信ヲ以聟トス。是ハ関下野守カ子ナリ。又神戸蔵人具盛（異本ニ友トアリ）ヲ聟トス。是ハ神戸楽三ノ孫悦岩ノ次男、末子タルニヨリ土師ノ福善寺ノ住呂トナシ、舎兄神戸太郎四郎、家ヲ継キ下総守ニ任ス。然ルニ永禄ノ初、早世シ法名涙岩居士ト名ツク。子無之ニ付、具盛家ヲツキ玉フ。同六年十月、六角義賢子息右衛門督義弼誅罪ノ時、大屋形ノ執権後藤但馬守、同対馬守父子、同一族并ニ国中ノ諸侍、悉ク六角家ヲ背キ、観音寺ノ城ヲ攻ルトキ、義賢父子、蒲生ヲ頼ミ日野ノ城ニ楯篭ル。国中ノ諸士ノ一味ニ付、江北浅井家ヲ語ラヒ、日野ノ城ヲセム。加之、江北上坂兵庫頭ハ後藤但馬守弟ノ同名治部養子トス。又蒲生定秀子息（20ウ）右兵衛大夫賢秀モ後藤但馬守姉聟也。然トモ蒲生主君ヲ敬ヒ一族ヲハナレ、ヒトリ忠義ヲツクシ、終ニ君臣和睦ヲ調ヘ、但馬守弟ノ後藤喜三郎ヲ以テ神戸家ノ家督ヲツカセ、国中無事ニイタスコト、是実ニ抜群ノ忠節タルユヘ、蒲生父子、其コロ六角家ニ於テ別シテ権威ヲ司ルモノ也。定秀ノ子孫繁昌シ、嫡子賢秀家ヲツキ、次男ノ茂綱ハ青地家ヲツキ、青地駿河守ト号ス。三男実隆ハ小倉家ノ養子トシ、関、神戸家両人ヲ聟トス。江州ニ於テハ池田左衛門尉忠知、池村治部允、美濃部上総介、菅原佐渡守モ聟ナリ。如此、家門大ニ栄ヘ、一族広キユヘ、余威ヲ以勢州ヲ謀ント仕ル也。

関家一味一党工藤之事

蒲生下野守定秀、連々ニ関、神戸ノ両家ヲイサメテ、永禄年中ノ比、和睦ヲナサシメテ、六角家ノ一味トス。両人同意ニ依テ一党、峯筑前（21オ）守、国府佐渡守、鹿伏兎宮内少輔以下、自然ニ六角家ノ幕下トナル。但シ被官ノコトクニハアラス。コヽニ一党、工藤ハ、永禄初比、勢州工藤家、互ニ両方ニ分ツテ、関ハ工藤家ヲ亡サントシ、工藤ハ関家ヲウタント志、サラニ朝夕兵乱ヤムマハナカリシ。或ハ一党工藤家ヲセメ、或ハ工藤家ハ一党ヲオヒヤカシ、関方雲林院表ニ打出、合戦毎度ニ及フ。両陣互ニ勝負カハリテ、未落居スルコトナシ。

塩浜合戦神戸城攻之事

凡軍ハ奇兵ヲ専ニシテ不意ヲ討ニシカス。或トキ工藤勢、北方ノ諸士ト同意シ、一党家ヲウタントス。長野次郎、雲林院出羽守、草生左京亮、家所掃部、細野九郎右衛門尉、分部宗右衛門、乙部兵庫介以下、工藤勢五千余騎、安濃浦ヨリ舟ニノリテ、東海ヨリ寄キタル。一党勢モ五千余騎、三重郡シホ浜ニ出向ヒ、是ヲ防ク。工藤勢、敵ノ多少ヲハカラス、塩浜ニ（21ウ）イサミ進ンテ、舟ヨリヒタ〳〵ト上ル所ヲ、一党勢、同音ニトキノ声ヲ作リカケ、赤旗ヒラメカシテ責立ル。

工藤勢、途方ヲ失ヒ、皆悉ク敗軍ニ及フ。究竟ノ侍大将アマタ討死シケリ。関家ノ味方、神戸蔵人ノ叔父神戸ノ某以下、コヽニ至テ戦死ス。神戸ノ城ヲセムルニ、又或時工藤家并南方ノ諸勢、神戸表ニハツ向シ、勢ヲ合、一味ノ諸家ヲセム時ニ、長野、工藤勢数千人ヲ催シ、神戸ノ西城ニオシヨセ、神戸方コレヲアイシロウ也。既ニ日ヲ暮シ夜ニ入、キヒシク責立ル程ニ、工藤勢、闇ニ迷テ進退サタカナラサルヲミテ、神戸勢一千余、オメキサケンテセメ掛、悉敵ヲ討トル。

私ノ評。古書ニ曰、夫合戦ハ来鋩ヲ避テ惰ヲ討ニシカストアリ。中太平記ニ、吉野チハヤノ城、寄手金剛山ナトノ猛勢八十万騎ト云ハ、三ヶ一トシルヘシ。尤中華国ノヒヽキ、日域ハ小国ナレトモヶ様ノ大軍ノアルヲ知ストヤ。此節伊勢ニテヶ様ノ大軍三ヶ一ト知ヘシ。尤太平記綱目同大全同（22オ）評判等可考。

赤堀城攻之事

右合戦ノナカハニ、南方波瀬ノ御所、同与力矢野下野守、阿曽弾正以下、赤堀ノ城ニ押寄攻動ス。赤堀ノ一族、与力以下ノ軍勢ヲ集メ、武威ヲハケマシ防キ戦ユヘニ、波瀬方、利ヲ失ヒムナシク軍勢ヲ引トル。此トキ城ヨリ敵ニ対シテ落書アリ。

赤堀ノフカキヲシラテハカナクモアサセヲセヽルハゼノ御所カナ

此赤堀ハ、神戸楽三ノ次男ナリ。神戸家ノ一味タルヲ以テ是ヲ攻、其後長野家、工藤家、勢ヲ催シ、赤堀ノ城ヲセム。夜ニイリテ、ソノ近辺ニ軍兵ヲフセ置、城内人シツマリタル時ヲ伺ヒ、乗入、鯢波ノ声ヲアケル。城内アハテサハキ防キ戦フトイヘトモ、不叶シテツヰニ落城ニ及フ。三間小六郎、佐治ノ某、広嶋ノ某、一番ニ掛入高名ス。コヽニ至テ赤堀家断絶ス。（22ウ）

私ノ評。赤堀ノ城ハ津白子亀山下入組赤堀氏白子下地士仕城ノアト、東ノ平山ニアリ。

関家出世之事

コヽニ、関ノ一党ハ猛威ヲフルヒ、北方亀山并ニ千草、宇野部以下ト一味ス。峯、南部、加用等、同意ニヨツテ、七郡ノ内ニ威ヲフルヒ、諸士各幕下ニ引付ル。中ニモ関盛信、武勇ヲハケマシテ、桑名ニ至テトリシツメ、豊田四郎兵衛ヲ以、代官ニスエヲキケル。然トモ、亀山、神戸、峯ノ三大将、大ニ武威ヲアラソヒ、ヤヽモスレハ内ワ合戦ヲハシメテ、更ニ一統セス。古書ニ曰、夫一家利ヲアラソフ時ハ大功ヲ立ス、一人主タルトキンハ治国ノ権アリテ共ニ栄耀ヲ可持者也。凡勢州ヨリ出世ノ大将ノナキコト、皆ヶ様ノイハレナルヲヤト、世人専ラ沙汰スト也。

私ノ評。凡勢州ヨリ出世ノ将ナキトハ誤リカ。平清盛公ハ平忠盛ノ（23オ）子也。白川院ノ御オトシ子ナリ。第国村ノ東山ニ清盛ノ誕生所、今ニアリ。其外名アル武士、歌人、名アル僧、多ク出世アリ。委細諸書ニノス。コヽニ略ス。伊勢三郎義盛ハ井ノ内ヨリ、渋谷土佐入道才木ヨリ、長田庄司忠致長田ヨリ、鎌田兵衛尉鎌田ヨリ、義経ノ妾シツカモ北ノ坂ノ下ヨリ、近代太閤秀吉公ノ御伽坊主ソロリト申ハ射和出生、外ニ名アル人多ク出ル。

足利義昭卿之事

永禄八年五月十九日、大和ノ志貴ノ城主三好ノ一党、俄ニ逆心ヲ企テ、公方義輝公ヲ討奉ル。将軍家ノ御舎弟、南都興福寺ノ御門主、一乗院覚慶大僧正ヲモ討奉ヘキ由聞ヘアルニヨリ、門主ヒソカニ近江国ヘ下向有テ、六角家父子、諸勢ヲ引具シ、同九年ノ春、京都ニセメノホリ、三好ト合戦ニ及。然トモ、三好シハラク都ヲヒラクニ依テ、サセル騒動ナシ。三好内々勢州ヘ攻入ラントセシカ、事ノヒ〳〵ニナリヌ。（23ウ）

同義昭卿退去之事

コヽニ六角家父子、初ハ足利殿ニ対シテ忠セツヲ尽スト云ヘトモ、ノチニハ是ヲサラニ不用、ヒタスラ自立ノ権ヲトラントス。此ユヘニ、永禄十年ノ秋、六角、三好ト和タンシ、佐々木義弼、却テ足利義昭公ヲ討ントス。因之、公方義昭、同八月中旬、密ニ江州八幡ヲ忍ヒ出、若狭ノ国ヘ下向有テ、武田大膳大夫ヲタノミテ、シハラクノ内、旅宿シ玉フ。ソレヨリ越前ノ国ヘ下着シ、朝倉左衛門佐義景ヲ頼玉フ。サ

レトモ一向朝倉同心セス。義昭弥途ニマヨヒ、御心ヲナヤマシ玉フ。

私ノ評。一乗院門主覚慶大僧正、シハラク興福寺ニ居住マシマサハ、サモアラン。興福、東大寺、七大寺ノ僧徒ヲ以フセキ玉ハ、イカン。出家ノ再ヒ還俗マシマスハ、仏意ニソムケ玉フ也。

織田信長出世ノ事　（24オ）

永禄ノ末ニアタツテ、美濃国織田上総介信長ハ、伊勢ノ国ヲ謀ラントシテ、家臣滝川左近将監一益ヲ大将トシテ、勢州ニサシ向ラル。カノ信長ト申ハ、人王五十代桓武天皇ノ後胤、平相国二十一代、織田備後守平信秀ノ二男、幕ノ紋ハ瓜也。元来越前ノ国ニ有。平氏ノ末孫、織田大明神ノ神職ニヤシナハレ、後ニ尾州ニ来リテ子孫コトニ繁昌シ、信長ノ代ニ至リ武威四海ニトドロキ、ハカリコト大ニスクレ、先尾州一国ヲオサメ、ツキニ駿州今川義元ヲウチ、次第ニ家領ヒロク、美濃国斎藤山城守龍興ヲ亡シテ、後ニ信長尾州清洲ノ城ヨリ濃州稲葉山ニ至。是ヲ岐阜ノ城ト名付テ居住セラレケル。

私ノ評。右大将源頼朝公ハ、左馬頭義朝三男、元来尾州熱田大宮司家ノ女子ノ腹ニヤトリ玉フテ、文治ノ比、天下ヲ治ム。信長モ織田ノ神官ノ家ニ養ハレ天下ヲシル。薩摩大守ハ頼朝公ノ妾ノ腹ニヤトリ、摂州住吉大明神ノ社ノ左リニテ誕生、次第、嶋津家今繁昌ス。信長岐阜ノ城（24ウ）築玉フ節、フシキナル事アリ。

滝川左近一益之事

其頃滝川左近将監大伴ノ宿称一益ト聞ヘシハ、人王十二代景行天皇（落字カ）武内ノ大臣ノ後胤、伴ノ四郎資包カ末孫、幕ノ紋ハ木瓜ナリ。二ツ引両也。元来江州甲賀郡大原ノ住人、尾州ニ下リテ初テ織田信長ニ仕、武勇ヲエ、忠功ヲハケマシ、蟹江ノ城ヲ給リ、次ニ尾州、濃州ノ西南長嶋ノ城ヲ拝領ス。兼テ勢州表ノ先手ヲ承リ、尾張境、長島、桑名迄、美濃境、大藪ヘン、所々ニ討テ出、北方ノ諸士ニ対シ、或ハ攻、或ハ和タンシ、武威ヲフルフユヘ、桑名、員弁両郡ノ諸士、木股、持福、其外アマタノ士、次第ニ織田ノ手下ニツク。

私ノ評。滝川家子孫、家康公御治世、滝川隠岐守、禄四千石被下。滝川讃岐守千五百石被下。江戸御旗本也。外ニノスルユヘ略ス。

織田信長出勢之事　（25オ）

永禄十年八月、織田信長朝臣、尾州美濃ノ軍勢数万騎ヲ卒シ、伊勢国桑名表ニ馳向、北方ノ諸士ヲセメ玉フ。南部、加用以下、普クカノ幕下ニツク。其後ニ信長、楠ノ城ニ押寄ラル。楠、防戦フト云ヘトモ、大軍ヲエテ不叶、降参ヲ乞、先掛ノ案内者トナル。次ニ信長、神戸ノ家臣山路弾正忠カ高岡ノ城ニ押寄、民家ヲ放火シ、山路、武勇ヲハケマシフセキ戦フ。凡信長ノ宿入ニハ必火ヲ放チ玉フ也。依之、敵途ヲ失ヒ途ニ迷ト云ヘリ。サレハ古書ニ曰、軍ニ勝コトハ夜ウチニシカス、城ヲヤフルコトハ放火ニシカスト。此時美濃西方ノ三家、氏家、安藤、稲葉、心カハリシケル。コノユヘニ信長ヨリ、滝川一益ヲ押ヘトシテ、勢北ニ居ヲキ、其身ハ濃州岐阜ノ城ヘカヘリ玉フ。是トキ安藤伊賀守ト、武田大膳大夫晴信入道信玄ト、一味シテ心替リシタル時也。

神戸和睦ノ事

永禄十一年二月、信長四万余騎ヲ卒シ、勢州ニ発向シ、北方ノ諸侍、千（25ウ）草、宇野部、稲生以下、悉其幕下ニ付。織田信長、重テ高岡ノ城ヲカコミセメラル。神戸、武勇ヲハケマシ、神戸ノ城ヲ楯篭。ステニ一センニ及ハントスル時、信長智計ヲメクラシ、高岡ノ陣所ヨリ、使者ヲ以神戸家ニ是ヲツゲラル様、御ヘント信長ト和タンニ於テハ、我子ヲ一人養子ニ遣シ一味セント也。神戸、子ナキニヨリ、早々和タンス。

私ノ評。古書ニ曰、夫養子ヲ入、国主ヲ聟トスルコト、治国ノ大功也ト云々。

此トキ神戸蔵人、一礼トシテ信長ノ陣所ニ奉ル。ソノ時、尾州士、日頃ノ神戸ノ武威ヲ伝ヘ聞クト云テ見物ス。其後、神戸家一味ノ故、謀略ヲメグラシ、一党ノ諸家ヲ信長ノ手下ニ引付ントス。是ヨリ、峯、国府、鹿伏兎以下、各織田家ノ手ニ属ス。但亀山ノ関家一人ハ、佐々

木、六角家ノ一味トテ、敵ノ色ヲ見合、シハラク彼手下ニ付ス。又神戸家、兼（26オ）テ叔父円貞坊ヲ六角家ヘ人質ニ出ス。今度神戸逆心シテ信長ト一味ニヨツテ、六角家是ヲ大ニイキトヲリ、円貞坊ヲ塩ツケニシケレハ、円貞忽ニ狂人トナリ、神戸ニ迷ヒキテモノハシリケリ。是ハ神戸楽三ノ末子也。元土師ノ福善寺ノ出家也。

工藤一味之事

信長ステニ勢州北方ヲ治メ、諸士ヲ案内者トシテ工藤家ヲホロボサンタメ、スクニ安濃津ニ至、細野ノ城ヲセメ玉フ。カノ細野九郎右衛門ハ、工藤家ニ於テ大剛ノ勇士也。武勇ヲフルヒ防キ戦フユヘ、タヤスクセメヤブルコト不叶。コヽニ其舎弟分部、北方故アツテ長野ヲソムキ織田家ニ属シ、別ニ長野ノ名跡ヲ立ンコトヲ乞フ。信長同意アツテ、則舎弟織田三十郎信包ヲ以テ長野家ノ名跡ヲ立ル。分部、川北、ハカリコトヲメグラシ、工藤ノ諸家ヲ以和タンシテ、雲林院、草生、家所、（26ウ）乙部、細野、其外工藤ノ一族、与力、被官等、悉ク信長ノ手下ニ属ス。シカウシテ、終ニ長野ヲ追出シヌ。長野次郎詮方ナク、父ノ多気国司家ヲ頼、南方へ退参。其後、関安芸守盛信モ、信長ノ手下ニ帰伏ス。

神戸養子之事

織田信長ノ武威、日々ニハヒコリ、北伊勢八郡、一党、工藤家ノ諸侍、其幕下トナル。コヽニ至テ信長ノ三男、三七丸ヲ以、神戸ノ養子トセラル。生年十一才ナリ。幸田彦右衛門尉ヲ傅リ被付。外ニ、岡本太郎右衛門尉、坂仙斎、三宅権右衛門、坂口、山下、末松、立木、川村以下、諸士ヲ相添ラレ、ノチ神戸蔵人ノ聟トシテ、神戸三七信孝ト号ス。シカウシテ、関、峯、国府、鹿伏兎等ヲ以、与力トセラル。弥信長ノ威セイ、日々ニカヽヤケリ。（27オ）

（白）（27ウ）

「多気具教行状記　二」（外題）（表紙）

（白）（見返し）

多気具教行状記目録

長野家名跡之事
滝川左近一益之事
南方押信長執権之事
織田信長上洛之事
江州蒲生之事
大河内城之事
同篭城之事
南方諸城之事
木造家謀叛之事
同合戦信長発向之事
阿坂城責之事
舟江城打出之事
大河内城責之事
舩江夜討之事
搦手夜討之事
魔虫谷合戦之事
弥三郎弓勢之事
国司与信長和睦之事
多気国司養子之事
一国平均之事
滝川柘植之事
曽原篭城之事
潮田長助并四五百森古歌之事
曽原城責之事
北伊勢長嶋一揆之事付一身田専修寺之事
神戸家隠居之事
長嶋発向之事付信雄祝言之事
三瀬御所之事

（1オ）

（1ウ）

織田信長公ノ君達元服之事
多気国司謀叛之事
関盛信勘気之事
足利義昭将軍補任之事
信長北伊勢長嶋出勢之事
越前国発向之事付田丸家督
多気国司使者之事
江州安土山城普請之事
長嶋篭城之事
国司不快之事
多気国司生害之事
同国兵法（司カ本ノマヽ）之事
国司君達生害之事
大河内家坂内家大腹御所之事
多気具教行状記巻二

（2オ）

（2ウ）

長野家名跡之事

織田信長朝臣ノ御舎弟ニ、織田三十郎平信包ヲ以、長野家ノ名跡ト定玉フ。庵芸郡別府上野ノ城ニスエヲキ、尾張侍アマタ付ラル。後ニハ神戸蔵人ノ妹聟トナリ、長野上野介信包ト改名ス。雲林院家、草生、家所、其外数多ノ士ヲ与力トス。其後、信包ノ家人ノ内、長野ヲ給ル士四人有。所謂長野与五左衛門、同孫左衛門、右二人ハ信包ノ家老也。各尾州士也。外ニ恒川次助広勝ヲ長野右馬允ニ改ム。是モ尾州ノ住人ナリ。其子長野次右衛門尉正勝ハ分部左京亮源光嘉ノ聟ナリ。外ニ津ノ住人、穴切屋新九郎ニモ長野ヲ被下、長野九郎右衛門尉ト号シケリ。

滝川左近将監之事

（3オ）

滝川左近将監一益ハ、織田信長朝臣ノ士、大将ヲ蒙リ、勢州表ノ奉行トシ、西尾張長嶋ノ城并河内谷ヲ給。北方ノ諸侍、千草、宇野部等、其外多クノ侍共ヲ以与力ニサシヲカル。彼滝川ハ、武芸ニ達シ智謀フカシ。此故ニ出世滞ナシ。威勢高シ。毎々出陣ノ日、諸侍討死ヲツクルトキハ、其タメニ我日頃扶持セリ、只死スヘシ、ト言葉ヲハケマス。然シテ後ハ仏僧ヲ供養シ、一々念比ニ士ヲ弔フ。惣シテ平生召仕ノ輩ニ、大形ノ罪ヲ免シ、殺害ヲ不好ト云リ。

南方ニ押ヲ置事

信長朝臣一族ノ内、織田掃部助ヲ南方ノ押ヘトシ、安濃ノ津ノ城ヲ守ラシメ、勢州表ヲ調ヘヲキ、其身ハ諸勢ヲ納レ、岐阜ノ城ニ帰リ玉フ。其後掃部助、今徳山ノ城ヲ攻、城主奥ノ山常陸介、大剛ノ勇士ナリ。勇気ヲハケマシ防キ戦フニヨツテ、中々落城セス。此トキ南方（3ウ）ハ今徳山ヲ助ケ、工藤勢ハ津ヲ助ケ、互ニ合戦ノ暇アラス。

織田信長執権之事

平信長朝臣、武威ヲ以テステニ美濃、尾張、伊勢、三河、遠江五ヶ国ヲ治メ、天下ノ権ヲトラントセラル。コヽニ足利十五代ノ公方、左馬頭源義昭卿ハ、朝倉左衛門佐義景ヲ頼、三好ヲ亡サンタメ越ヘ玉フ。サレトモ朝倉同意セス。コヽニ至テ義昭ハ、織田信長ノ武威ヲツタヘキヽ、ヒソカニ使者ヲ以テ織田ヲ頼玉フ。織田畏テ其心ニ随フ。依之、公方義昭、永禄十一年七月、越前国ヨリ濃州ヘ至リ玉フ。

信長朝臣上洛之事

信長、公方義昭ト一味ニヨツテ、先江州ヲ謀、幕下ニ引付、其後セメ上ラントセラル。コヽニ、江北浅井備前守長政ハ、信長妹聟ナレハ一味ス。六角ハ和睦ヲ用ス、直ニ義絶ニ及。古書ニ曰、夫聖人ハ物ニ不滞、先和ヲ用ルトキハ、永ク（4オ）其家督ント云リ。六角智計タラサルカ。依之、信長同九月、濃州尾陽并伊勢ノ滝川勢、関ノ一党、彼是都合五万余騎ヲ引率シテ江北ニ発向シ、六角家ヲ誅罰アリ。六角左京大夫入道承禎、同子息右衛門督義弼、同次郎左衛門尉賢永等、終ニ蓑作ノ城ヲセメオトサレ滅亡ニ及フ。信長シハラク観音寺ノ城ニ入、人馬ヲヤスメ、コヽニ至江南ノ諸士、或ハ開城シ、或ハ降参シ、近藤、後藤、青地、山岡、池田、小川等、悉ク織田家ノ手下ニ付。其後信長上洛アツテ、三好一家ヲ亡シ、五畿内ヲ平治シテ、足利義昭卿ヲ

将軍職ニ任セシメラル。

蒲生賢秀之事

蒲生賢秀ハ、六角滅亡ノ後、江州ノ諸侍多ク織田信長ノ手ニ属ス。此トキ蒲生家モ又信長ヨリカヘ使者ヲ以是ヲ和シ玉フ。然リト云ヘトモ、義ヲ守リ、更ニ不用。蒲生下野守入道快翰、子息右兵衛大夫賢秀ハ、日野ノ城ニ楯篭リ、（4ウ）武威ヲフルフ。神戸蔵人、重テ日野ニ立越、彼父子ヲイサメテ、ツヰニ信長ノ幕下トス。則賢秀カ子鶴千代丸ヲ人質ニ、観音寺ノ城ニ送リ、信長ニ礼義ヲ述フ。信長、此鶴千代ヲ一目ミテ、此児眼、常ナラス、必武芸可有、我聟ニスヘシ、トテ約ヲセラル。果シテ後ハ其言葉ノコトシ。明年、信長九歳ノ息女ヲ玉ハリ、祝言事ヲハリテ後ニ、鶴千代丸元服ヲトケテ、蒲生忠三郎氏郷ト名ノル也。後蒲生飛騨守氏郷ト申候。

私ノ評。蒲生忠三郎氏郷ハ、松坂ノ御城、天正十六戊子年松ヶ嶋ヨリ築ナリ。其砌禄拾二万石。享保五子年マテ百三十八年ニナル。此節氏郷三年ノ後、奥州会津若松国替百二十万石ニナリ玉フ。御子飛騨守秀行ハ、家康公ノ御聟也。後石田氏郷カ乱ノ節、瀬田掃部方ヘ茶ノ湯ノ会ニ行、チンドクニアヒ、文禄二年四月卒去ス。秀行後十八万石三十六万石ニナリテ、下野宇都宮ヘ国替、御子蒲生兵部大輔、四国伊与松山ノ城ヘ国替、委曲ハ関ヶ原御陣（5オ）ニアリ。

大河内城之事

コヽニ勢南多気ノ国司北畠具教卿ハ、永禄ノ末ニ至、織田ノ軍勢ヲ防ンタメニ、先殿舎ヲ飯高郡細頸ニ造リ、城郭ヲ同郡大河内ニ立テ、嫡子信意卿ユツリ、大河内御本所ト号ス。具教ハ入道シ玉ヒ、御法名不智ト称ス。此トキ大河内家ハ、大淀ニ移サル。然ニ藤方家ト織田掃部亮ト合戦ヲイトミシニ付、国司北方ニ向ヒ毎度軍アリ。

勢南篭城之事

永禄十二年、織田信長朝臣伊勢国ヲ治ントシ玉フ。依之、同九月十日頃ヨリ、勢州以ノ外ニサウ動ス。国司ノ物頭ニ日置大膳亮、他所ノ焼亡ヲミテ、細頸ヲ自焼シテ大河内ニ馳集ル。然ハ南方ノ諸士、地士等、各諸城ニ楯篭ル。先大河内ノ大御所具教入道不智、御本所信意父子トモ大河内（5ウ）ノ城ニコモル。相伴フ諸家ニハ、次男長野御所、其外ノ一族ニハ田丸ノ御所、東ノ御所、大阪ノ御所、八下ノ御所、薗御所、森本御所、森本飛騨守子息彦市郎、方穂民部少輔、林備後守、子息新之允、侍大将ニハ鳥屋尾石見守、同右近将監、水谷刑部少輔、岸江大炊頭、同又三郎、安保大蔵少輔、同右馬允、磯田彦右衛門尉、佐々木源左衛門尉、同半右衛門尉、今川左馬允、野呂弾正忠、同左近将監、同三郎右衛門尉、山本左馬介、長野九郎、朴木隼人正、玉井兵部少輔、同新次郎、星合左衛門尉、奥山帯刀、稲生勘ヶ由左衛門尉、同与四郎、家木主水佐、石橋治部大夫、同右衛門尉、田上左衛門大夫、榊原弥四郎、同右京亮、山崎大炊頭、同兵部少輔、真柄宮内丞、同修理亮、久保参河守、杉山菅右衛門、山室十郎左衛門尉、服部孫左衛門、柴山長九郎、同出羽守、水野少次郎、大西平三郎、三瀬蔵人、鹿爪主殿、三竹五郎、九郎、大内山但馬守、阿曽弾正、長嶋左京亮、下村仁介、潮田長介、近田左近、神戸治部入道、（6オ）熱田源兵衛入道、久世五郎右衛門、渡部筑後守、出口七郎、九郎、小胡曽兵蔵、湯原治太夫、牧戸与五郎、宮田右京進、松井加大夫、寺江三郎、三松甚吉、黒田吉蔵、中津権太郎、菅瀬左大夫、牧野右門、加藤五兵衛、広田源次郎、佐藤弥吉、其外、江馬、広櫃、粟谷、峯、乙栗栖田、引家野、奥野、奥村、福木、粟野、山岡、閼伽桶アカヲ、滝野、馬場、五筒組、六呂木、左門、波多瀬某、福山、山副、谷、三田、満賀野、新岡、岡村、北岡、畑杵、吉懸入道、同市之丞、長森越前守、堀内、堀江、堀山次郎左衛門、井西、中村、惣シテ南方五郎ノ軍士、各勇ヲハケマシ、堅ク篭城シ、柵二重ヲ結、構キヒシク、兼テ兵粮ヲタクハヘ、堅固ニ是ヲ守ト云リ。

南方諸城之事

勢州ノ路次ニハ、今徳山ノ城ヲ奥山常陸介守護ス。小森上野城ハ奥山左馬允是ヲ守ル。木造ノ城ハ木造左衛門佐具康守之。八多ノ城ハ大多

和兵部太輔守之。阿坂ノ城ハ大宮入道同大之丞守之。舟江ノ城ハ本田右衛門尉同美作（6ウ）守コレヲ守ル。曽原ノ城ハ天花寺蔵人同小次郎、岩内ノ城ハ岩内ノ御所、藤方ノ城ハ藤方刑部少輔、各城郭ヲ堅メ、勇威ヲフルヒ、キヒシク篭城ス。然リト云ヘトモ、三好カ一党、畿内ノ内大ニ乱逆ヲ発スルユヘ、是ヲ退治ノ為、信長、京都ニセメ上リ玉ヘハ、勢州責、沙汰ナシ。此トキ北畠家、足利家トモ、信長朝臣ヘ対シ和睦アラハ、双方トモニ今ニ子孫ハン昌スヘキヲ、浅慮ニシテサラニ是ヲ不用。政道愚ナルユヘニ、一家終ニ滅亡ニ及フトカヤ。

木造具康謀反之事

永禄十二年夏五月、木造家父子、俄ニムホンニヨツテ大ニサウトウス。抑、木造ノ御所ト申ハ、具政朝臣ハ北畠大納言晴具ノ子息、大納言具教卿ノ御舎弟ナリ。故木造家具ハ顕俊卿七世ノ孫子也。晴具ノ妹聟也。家具ニ女子有テ男子ナシ。依之、晴具卿ノ子息ヲ養子聟トシ、木造兵庫頭具政ト号。シカルニ具政ニ本腹ノ子ナシ。別腹ノ子息ヲ立、木造左衛門佐具康ト名ノル。（7オ）然シテ養父具政ハ、戸木ノ風早山ニ住シ、戸木ノ御所ト称ス。イサヽカ宿意ニヨリ、連枝ノ好身ヲ忘レテ反逆ノ企アリテ、南方北畠国司ニソムキ、信長ノ幕下ニツキケル。是旨趣、木造家ノ庶子ニ、源浄寺ト云有。則木造菩提所ナリ。此僧、文武ニ達シテ天下ノ治道ヲサツシ、并木造家ノ老ニ柘植三郎左衛門尉ト談シテ、終ニ木造家ヲイサメテ起二逆心一ケル。

私ノ評。木造家ノコト、委曲伊勢軍記ニ載ス。コヽニ略ス。

木造合戦之事

木造家、ステニ南方国司家ト義絶セシムルニヨツテ、国司大ニイキドヲリ、不日ニ退治セント欲シ、先柘植三郎左衛門尉カ人質ヲ俄ニセツカイシ、最期ノアハレサ、見聞ノ輩落涙ス。其後、沢、秋山以下、南方ノ士、木造ノ城ヲセメ、合戦ニ度々ニ及フ。城中ヨリ海津喜三ト云鉄炮ノ名人、ツヽケ打ニ寄手ノ中ヘハナチケル。クツレ討ルヽ者数多シ。此トキ和州秋山ノ臣ニ坂甚次郎討（7ウ）死ス。加レ之、木造ハクツ竟ノ城郭ナリ。織田掃部介是ニ与力ス。工藤、滝川、関家、一味ス。急ニセメオトスコト不能、ムナシク時刻ヲウツス。

織田信長発向之事

同年八月廿日、織田上総介平信長、勢州桑名表ニ発向シ、蜜ニ美濃、尾張、伊勢、近江ノ軍勢ヲ催シ、都合七万騎也。信長鷹狩ト号シ、一両日山野ノ安危ヲウカヽヒ、スクニ南方ヘヨセラルヽ。是ハ不意ヲウタンタメナリ。夫大将鷹狩ヲ用ルコト、全ク遊興ヲコノムニアラス、凡ソ民ノ四季ノ辛労ヲシランタメ也、此故、主将ハ是ヲ可用、士僕ハサノミ不可興ト云リ。同廿三日、織田家ノ先陣、滝川勢、関勢ヲ以テ、小森上野ノ城ヲ押。織田掃部亮并工藤勢ヲ以テ、今徳山ノ城ヲ押ヘ、諸勢ヲ通シ玉フ。奥ノ山左馬允、同常陸介、元来義士ナレハ、勇ヲハケマシ戦ト云ヘトモ、織田勢是ヲセム。木造ニ至、一両日軍評定アリ。同廿六日、信長朝臣、又木造ノ城ヲ出、源浄寺、柘植三郎右衛門尉ヲ案内者（8オ）トシ、山際ニ至テ諸勢ヲスヽメ、民屋悉ク放火シ玉フ。コヽニ先勢、八太ノ城ヲカコマントス。大多和兵部、防キ戦ハントスルニ、其朝霧フカク、ゼンゴ分明ナラス。敵ノ様体ハカリカタキニ依テ、織田セイ是ヲセム。

阿坂ノ城攻之事

信長朝臣ヨリ使者ヲ以テ、阿坂ト岩内ノ御所ヘ遣シ、和タンセントノ企ナリ。岩内御所ノ返答ニハ、大河内ノ城、次第ニ可防由ヲ述テケル。サレトモ阿坂ハ是ヲ不用。此ユヘニ先手ヲ召カヘサル。同廿七日、阿坂ノ城ヲセメラル。城主大宮堪忍斎入道、同大之丞、同九兵衛尉、其外手下ノ地士共、兼テ浄昭寺ヲ自焼シ、寄手ヲ相待。是ハ左右ナク敵ヲ入マシキタメナリ。カノ寺ハ大空和尚ノ開基也。則多気ノ国司ノ菩提所ナリ。ムカシヨリ袖岡山ト云テ名所ナリ。

ミワリノスソニナカル、泪川袖岡山ノシツクナリケリ（本ノマヽ）

当山ヲ詠セシナリ。信長ノ先陣、木下藤吉郎秀吉、阿坂ノ城ヲカコ（8ウ）ミセム。城内シハラク防キ戦フ。大宮大之丞、大力精兵ノ勇士ナレハ、サシツメ引ツメサン〳〵ニイル。寄手恐テ進ムコトアタハス。秀吉、真先ニ進ンテ左ノ腿ヲ射トヲシケル。サレトモ是ヲコトト

モセス、大勢ハケシクセメウコカシケレハ、城中ツカレテ、家老大宮源五左衛門、同篠介両人、俄ニ心カハリシテ、鉄炮ノ薬ニ水ヲ入ヲキシユヘ、大宮入道ツキニ降参ヲ乞、開城シテ落行ケリ。信長卿、滝川勢ヲ城ニ入ヲキ、油断ナク是ヲ守ラシメ玉フ。

私ノ評。阿坂ノ家老ノ方ヘ、信長ヨリ三千貫ノ朱印領知被下。依之、後切同断ノ仕方也。サルニ由テ落城ニ及フ。

舟江打出之事

勢州南方ノ通路ハ、舟江道也。此ユヘニ本多方、当城ヲ守ル。加勢トシテ小原ノ冷泉方、名張ノ北方、同西岡方、其外彼是同意ス。爰ニ軍評定ノトキ、渋味ノ城主乙部兵庫頭藤政進出テ曰、舟江ニハ究竟ノ士卒アリ、タヤスク落（9オ）城スヘカラス。此所、秋山領分トシテ諸侍ノ会所ナリ。本田右衛門尉ヲ大将トス。本田美作守ハ、彼乙部家ノ聟ナリ。其子小次郎親康、若年タルニ依テ、伯父右衛門尉是ヲ守護ス。此ユヘニ、信長朝臣、其枝ヲ置キ其根ヲ断セントシタマヒ、山キハニツイテ勢ヲ通サルト云々。廿六日ノ夜、阿坂ノ城ヲセメンタメニ、信長、先勢ニ下知シテ呼カヘサル、トキ、舟江ノ本田勢、森、中西、山邊、高嶋、大門、斎藤、討テ出、勾ト保長トノ間、小金塚ニオキテ、織田勢ヲカケチラシ、分取高名シ、首数アマタ討取。依之、舟江方、武名ヲアラハス。廿七日ノ夜、信長勢、大河内ニヨスルトキ、舟江ノ侍、昨夜ノ如クニ小金塚ニ打出遮ル。信長卿ノ先勢、兼テ用意シ、待請攻戦フ。舟江勢敗走シテ、一志郡ノ侍、長藤十郎左衛門尉、同子息善七、薬師寺芳情以下、宗徒ノ士卒討死ス。其不意ヲ討トキハ利有、再往ノ不意ハ不可然。今夜ノ打出、味方ノ不覚ナリト、山辺次郎右衛門尉、達テ制レ之スレトモ、大門六郎右衛門、昨夜討出（9ウ）合サルコトヲ悔テ、如此ニス、ンテイサメシ也。其後、信長ノ味方、東海舟手ノ士トモ、舟ヨリ上ル所ヲ、舟江ノ本田勢、曽原ノ天花寺小次郎、黒部ニ出テ夜討シ相戦フ。

大河内攻之事

同廿八日、信長朝臣、七万余騎ノ軍兵ヲ以テ、大河内ノ城ヲカコミ給フ。抑、大河内ノ城、勝地ニシテ七尾七谷アリ。南方ヲ大河内ト云、北方ヲ野津ト云。大木シケリ大竹生ス。追手ヲ広坂ト名付テ北方也。搦手ヲ龍蔵庵坂ト云テ南方也。西ニ養徳寺有。火ヲ放チテ焼ク。東方ニハ大河内川有。織田ノ軍勢、四方ノ山々ニ陣ス。東方ハ桂瀬山ナリ。此所ヲ恋ノ山ト云リ。既ニ其夜ニ至リ、池田勝三郎、源信輝、広坂口、市場ノ宿ヲヤフル。日置大膳亮、コ、ヲ持チ諸侍与力ス。池田ノ先陣、土倉四郎兵衛、八木笹右衛門、時ヲ作リテセメカ、ル。日置、勇ヲハケマシ防キ戦ヒケリ。家木主水佐、高名ス。合戦（10オ）数刻ニ及テ、日置、城中ニ引退ク。同廿九日ノ暁ヨリ、大河内ノ城ノ四方ヲ、信長カコミ玉フ。弓、鉄炮、疾風雷雨ノコトシ。其日ヨリ、両方イサミアラソヒ、数日ヲ攻戦ト云ヘトモ、落字本ノマヽ

舟江城夜討之事

国司具教卿、兼テ遠方ニ下知ヲ加ヘ、織田信長ノ陣所ヘ夜ウチニセント仕給フ。然トモ敵ノ大軍ニ恐レ、速ニ打出ル者ナシ。例ノ舟江ノ溢者トモハカリ集リ、同九月上旬、丹生寺ニ夜討ニ打出ル。此所ハ市場、寺井ノ北方ニテ、美濃国大垣ノ城主氏家常陸介入道ト全ノ陣所也。夜更テフキニ打入、火ヲハナチ、セメ立ル。大垣ゼイ、タマリカネ、蜂谷般若助ト名乗カケテ防戦スト云ヘトモ、ツキニ高島椋右衛門カタメニ討取ル。其外究竟ノ士三十六人討死ス。舟江方、各其首ヲトリ、勝トキヲ上テ引返ス。

搦手夜討之事

（10ウ）

同九月、織田信長朝臣、手立ヲカヘテセメントス。南方ノ寄手ニ下知アリ。池田勝三郎、丹羽五郎左衛門、稲葉伊与入道一徹ハ搦手ニセメ入、夜討セントス。依之、三大将以下、諸侍、夜ニマキレ龍蔵庵口ヘ入、朝日ノ陣ヨリ二ノ丸ヘ忍入テ、時ノ声ヲツクル。此声セメテノ不覚也。但シ本丸ニ入所ヘ鯢波ヲ上クト云リ。国司勢、是ヲ聞トヒトシク、本丸ヨリ松明ヲ投出シ攻立ル。寄手、的ニ成テ打タオサル。死人山ノ如シ。其後、門ヲ開、日置大膳亮、安保大蔵少輔、家木主水佐、長野左京進以下ノ諸侍、鍬ヲ引サケ太刀ヲ振テ討出、合戦ニ及フ。各

高名ヲキハム。敵味方乱レ合テ、シハラク黒煙ヲタテ相戦。後ニハ両方ヘワカル。此トキ信長ノ侍大将、朝日孫八郎、波多野弥蔵、近松豊後守、神戸伯耆守、神戸四方之介、山多太兵衛尉、寺沢孫九郎、溝口富之介、斎藤五、古川久介、川野三郎、金松久左衛門、鈴木主馬允十三人、其外一騎当千ノ諸侍、アマタ討死ス。城中空円入道ハ、智謀ノ士ニテ、敵ノ色ヲ（11オ）ミテ門ヲ開キ、大音ヲ上、夫老兵ハ掛引ヲソシ、若武者計早ク進ンテ早ク引ヘシ、ト云テ、諸士出レハ、門ヲ打。又時刻ヲハカツテ軍勢ヲ引シムルトキ、門ヲ開キテ其人ヲ改メ、言葉ヲ問テ、立勝居勝ヲ用ユニ付、来敵ヲ防ク。国司、是ヲ大ニ感シ玉フ。コヽニ滝川左近一益、同十月上旬ニ及ヒ、信長卿ノ陣所ニ馳マハリ、当城数日ヲ送リ、落シエサルコト無念ニ存ス、此一益一戦仕ン、ト云。伊勢ノ軍兵ヲ引具シ、西ノ方、真虫谷ヨリ攻上ル。城中ヨリ鉄炮ヲ打出シ、是ニヘキヱキシテウタル、人馬、イヤカ上ニ落重リテ、谷ヲ埋ム。然トモ滝川一益、是ヲ物トモセス、一筋ニキホヒセメカヽリ、ヒタ〳〵ト塀ニ取付テ、乗越ントスル所ニ、城内兼テ支度シタル竹鎗ヲ、人毎ニトリモチテ、滝川方ヲツキオトシケレハ、コヽニテ寄手多ク疵ヲカウフリ落ケルカ、起上ツテ透間ナクセメノホル。城兵、猶スヽンテ隙ナク突立レハ、滝川勢ツヰニ敗軍ニ及フ。（11ウ）

諸木野弓勢之事

織田信長卿ノ本陣、桂瀬山ニテ一人ノ大兵、松ノ木ニ寄掛リ、城中ニムカヒ大音ヲアケ、大腹御所ノ餅喰ト呼ツテ、様々ノ悪口ヲ吐キチラシケルトキニ、城兵是ヲニクミ、精兵ヲ尋ネ、カノヤツヲ射コロサセント評定シテ、弓勢ノ達者ヲヱラム。其比、和州神楽岡ノ城主秋山右近将監カ家中ノ士ニ、弓ノ上手三人アリ。所謂、諸木野弥三郎、秋山万之介、同嶋之介等也。中ニモ弥三郎スクレタリトテ、是ニ命ス。諸木野、伺公シ畏テ立向ヒ、大ノ弓矢ヲ以テ射ケルニ、其矢アヤマタス四五町射ワタシテ、件ノ大兵ヲ松ノ木ニ射ツケタリ。信長、此由ヲミ玉ヒ、感喜ナヽメナラス。則其矢ニ褒美ヲソヘ、敵陣ヘ送リ玉フ。弥三郎カ高名ハサルコトナレトモ、信長卿ノ計ヒ、流石ノ名将ナリト敵味方、同意ニ誉アヘリ。

信長与国司家和談之事

（12オ）

去ホトニ、織田信長、当城ヲカコミ数日ヲ重ネ、人々ニ逆心ヲスヽメ玉ヘトモ、心ヲ変スル者ナク、只野呂左近一人、逆意セシカ、其コトアラハレ、城内ニテ被害。兵粮ヲ断ント欲シ玉フコト、凡五十日ヲカコミ玉フ。コヽニ国司ノ家従鳥屋尾石見守、智謀フカキ勇士ナレハ、兼テ此コトヲ悟リ、篭城ノ初ヨリ諸軍勢ニ命シテ草木ヲ令食、国司父子ニモ士卒トヒトシク食物ヲソナヘケレハ、兵粮サラニ尽ルコトナシ。信長卿、退屈シ玉ヒ、此上ハ和睦ヲ以テ平治セン、トノ玉ヒ、織田掃部介ヲ使者トシテ城内ヘ趣シメ、和タンノ由ヲ述ラル。詞ニ曰、信長カ実子ヲ信意ノ養子ニ定、無事一味ノ思ヒヲナサン、ト云々。国司方、評定シテ、是先人質ヲ取ニ有ト一同ス。則、朴木隼人正ヲ使者トシテ、同十月下旬、ツヰニ織田、北畠、和タンセラレ畢。実ニ敵ヲ平クコトハ和ヲ用ルニシカス。古書曰、右賢ノ詞ニモ、戦ニ勝ハ和ニ有テ衆ニアラス、ト云リ。信長ノフルマヒ、尤智謀ノ深故ナリ。シハラク国司ト（12ウ）一味ニ由テ、諸勢ヲ入、并諸関ヲヒラキ玉フ。信長幸此折カラ、伊勢参宮両宮神拝ヲトケント、頓テ参宮シ玉ヘリ。宿所ハ堤太夫也。シカル所ニ、福井太夫、是ヲ悪ミ、宇治参宮ノ次テ、密ニ織田家中ノ旦那ヲ頼テ、信長卿ヲ我宿所ニ入奉ル。堤太夫立腹シテ、其趣ヲ言上ス。織田家ヨリ福井太夫館ヲセメラル。福井、是非ナク家ヲ出、シハラク蟄居ス。信長卿ハ、濃州岐阜ノ城ヘ帰リ玉フ時、例ノ舟江ノ溢者トモ、三渡リニ出向、鉄炮少ツヽ先手ノ中ヘ打カクルト也。

北畠国司養子之事付一国平均

信長卿ノ次男、茶箋丸ヲ以、北畠ノ養子トシ、織田掃部亮ヲ南方ノ奉行トセラル。其外、生駒半右衛門尉、林豊後守、猶又諸士多ク相添ヘ遣サル。茶箋丸ハ、先舟江ノ薬師堂ニ入玉ヒ、滝川一益ハ、同所浄泉寺ニ宿ス。カクテ主従五十余ヶ日、コヽニ逗留ノ内ニ、万事仕置アリ。織田（13オ）家来ノ外、数多ノ輩、諸方ヨリ来テ、舟江ノ城ヲ守

護ス。国司父子舟江ノ城ニ至リ、嘉儀ノ盃酒有テ、家人何モ万歳ヲ祝ス。

一国平均。信長卿、武威天下ニ振フ。諸国ヲナヒケ勢州一国ヲ治メントテ、次男茶筌丸御曹司ヲ、御本所信意ノ養子トシ、大河内ノ城ヲ守ラシメ、国司ノ家人、是ニ与力ス。三男三七丸ヲ神戸ノ城主トシ、関勢コレニシタカフ。信長卿ノ舎弟、上野介信包ヲ以、安濃津ノ城ヲ守護セシメ、工藤勢、是ニ与力ス。家人滝川一益ヲ以、長嶋ノ城ニ居ヘ、北方ノ諸士、是ニ与力ス。一益、初テ検地ヲ入レ、諸侍ノ領分ヲ改メ、其後、諸家是ニナラヒ、諸方ニ検地ヲ沙汰ス。其頃、信雄ト信孝両人、南北ノ境ヲ改ラルトキ、雲出川ヲ以テ定ントセラル、ニ、アル老人ス、ミ出テ、古歌ヲ引テ云、

風早ノ池ノナカレノシタ、リハアノト一志ノサカヒナリケリ（13ウ）

此歌ヲ以、其境ヲ決定ス。

私ノ評。山田ノ住人龍尚舎散人ノ伊勢風土記ト云書ニ

風早ノ池ノ流ヲシタフニハアノト一志ノサカヒヲソシル

トアリ。イツレ二首ノ内ナルヘシヤ。

風早ノ池トハ、久居ヨリ十町西ニアリ。戸木村西ノ山ノ中ニ有。

風早ノ池ニテ、西行法師、紀貫之、鴨長明、吉田兼好ノ詠歌有。

池、東西六町余、南北二町余有。久居領下也。

滝川柘植之事

織田信長卿、木造家ノ臣ニ滝川ノコトハ、元源城寺ノ住職タリ。柘植三郎左衛門尉ヲ以、茶筌丸ニツカヘル。源城寺、此トキ還俗シテ、一益同名トナリテ、滝川兵部少輔ト号シテ、シハラク滝川左近将監一益カ館ニ旅宿シ、茶筌丸ニ仕ヘ、滝川三郎兵衛尉雄親ト名ノリ、後ニ太閤秀吉公ノ治世ニ、受領シテ（14オ）羽柴下総守トアラタメ、扨柘植三郎左衛門尉某ハ、元来伊州柘植ノ住人ニテ、先祖ハ平家ノ侍、池弥平兵衛尉宗清カ末孫ナリ。シカルヲ勢州ニ趣、木造家ニ仕ヘテ、ツヰニ其家長トナル。滝川、柘植両人、発明ニシテ武道ノ達人タルユヘニ、信長、是等ヲ賞シテ、信雄ニ付ラル、也。

曽原篭城合戦之事

同年十二月、信長卿、織田掃部亮ニ命シテ、南方ノ諸城ヲヤフラントシ玉フ。則、掃部亮、稲生勘ヶ由左衛門尉ヲ案内者トシテ、舟江ヨリマツ矢倉ヲクッシ、塀ヲコホッテスツヘキ由、アヒ触ラル。彼両人、曽原ノ城ニ至リ、右ノ趣ヲ云ワタス時ニ、城主天花寺小次郎、サラニ不用之。伊賀士ニ下知シテ、忽ニカノ稲生ヲ討コロス。此故ニ勢州サウ動ス。明ル元亀元年、織田家、北畠家ノ諸士、付城ヲ拵、攻動ス。此サハキニヨツテ、諸城ノ内一城ヲ破ルコトアタハス。却テ国司家ノ近臣潮田長助、新城ヲ四五百ノ森（14ウ）ヘ築ク。コノ山ノ名所ヲ古歌ニ、

イセノ国四五百ノ森ノホト、キスナノリステタルコソノ古声

是、当所ヲヨメル歌ナリ。潮田長助、最前大乱ノ時ハ城ヲツクラスシテ、今カ、ルハカラヒハ跡辺ナリト、皆人是ヲ嘲ル。彼長助カ父ハ、スクレタル大力ニテ、当国ニカクレナキ者ナリ。肥牛ノ四足ヲ持、サシ上テ道ヲヨケ行。或ハ大木ヲ曲ケテ腰カケ、大竹ヲツカミヒシキ帯トシ、大門ノ扉ヲハツシテ流水ヲフサクナト、サラニ凡人ノ仕業ニアラスト也。

私ノ評。潮田氏四五百ノ森ヘ小城キツキシハ、文禄三年也。其後、蒲生飛騨守氏郷ノ松ヶ嶋ヨリ今城ヲ築クコト前ニシルス。松坂御城主ハ、紀伊国和歌山御居城、紀伊大納言源二位頼宣卿、元和五年ヨリ常陸水戸城ヨリ和歌山ニ御移リ、松坂ノ城代々城代持也。田丸、白子、三領ノ惣シテ、享保五庚子年、北村善之丞（元ハ福嶋左衛門大夫家老。ノ家筋ナリ）

（15オ）

曽原ノ城主天花寺小次郎ハ、累年ノ富人ナレハ、兵粮ヲ貯ヘ三年ニ及テ落城セス。此ユヘニ、近ヘン悉ク亡所トナリヌレハ、元亀二年夏、北畠国司、信長両大将、舟江ノ城ニ出馬アリ、諸軍舟江ノ城ヲセム。家木主水佐、無双ノ勇士ナレトモ、主君ニムカヒ弓ヲ引ンコトヲ恐レ、俄ニ心ヲヘンシ味方ニ参ル。敵、是ヲミテ、討トメントノ、シツテ悉ク追掛、弓ヲ射、鉄炮ヲ討カクル。家木主水ハ舟江ノ侍高島椋右

衛門、森甚左衛門ニタヨリテ敵ヲフセカシム。高島ハ弓ヲモチ、森ハ鉄炮ヲ以、各ハタラキケルカ、後ハ両人、矢玉ツキ、矢一スチ玉一ツノコル。追来ル敵モ如此。互ニ相引ニス。家木下知シテ、ソツジニ矢ヲ放ツコトナカレト云。其トキ、敵ノ矢来テ高島カ弓ニアタル。敵コレヲミテ逃テ行。家木悦申ハ、矢ノ武具ニアタル者ハ死セス、只敵ノ中ヘス、ミ入テ可戦、トイサム。其トキ寄手一同ニセメ立レハ、天花寺ツキニ滅亡ス。ヨシナキ勇心ヲハサミ、独主人ノ命ニソムキ、ヲノレト自滅スルコソアサマシキ。

（15ウ）

長嶋一揆之事

去ル元亀元年ノ秋九月ヨリ、摂州大阪一向門跡、ムホンニ由テ、一宗ノ僧徒、諸国ニ出張ス。爰ニ北伊セ長島ノ近ヘン、嶋々ニ海賊トモ此等ニ一味シ、難所ヲカ、ヘ、一揆ヲ起シ、男女トモニ必死ノ誓ヲ堅メ、身ヲカロクシ、国主ノ下知ヲカヘリミス、諸所ヲ押領シ、悪逆ヲ企ル。コノユヘニ、滝川左近一益、長嶋ニ於テ日夜合戦ヲハケマスト云ヘトモ、一揆ノ奴原、其志ヲ一致ニシテ、又物ノ数トモセス。当国ニモ一向宗ノ本寺アリ。安濃郡一身田ナリ。但是ハムホンノ等類ニアラス。抑、此専修寺ト申ハ、元来関東下野国芳賀郡高田山無量寿院専修寺ト云テ、大坂本願寺ヨリ惣領タリ。爰ヲ以、始終大坂方ニ一味セスト也。件ノ寺ノ祖師、親鸞上人十世ノ後胤ナリ。真恵上人ト申ハ、飛鳥井家ノ子息ヲヤシナヒ、尭恵大僧正ト号ス。然テ、乙部兵庫頭源藤政カ聟ナリ。其家督尭真僧正ハ織田信長公ノ姉聟、犬山ノ（16オ）鉄斎ノ聟ナリ。

私ノ評。一身田御代ノ内、尭円大僧正ノ御父尭秀大僧正ハ、近衛関白太政大臣ノ御子、但シ尭秀ノ御代ニ、今ノ御堂御建立也。尭円大僧正ノ御前室ハ、藤堂大学頭、藤原高次朝臣ノ御息女也。享保五庚子頃ノ御門主ハ、伏見院（本ノマヽ）、一品親王ノ第五ノ宮勝宮ト申ス。今ハ円猷御門跡ト申。紀州家、藤堂家、将軍家ノ御内縁厚シ。御知行三百五十石余也。

神戸家隠居之事

織田上総介平信長卿ハ、勢州ノ諸家ヲ押ヘ、養子ヲ入シ神戸ノ某、是ヲ押ヘ玉フユヘニ、外ニハ帰伏スト云ヘトモ、内ニハナイカシロニシ、各心ニマカセスシテ日ヲ送ル。中ニモ神戸蔵人ハ、関盛信ノ子勝蔵ヲ兼テヨリ養子ニ入ヘキノ約アリ。シカルヲ不慮ニ相違出来テ、両家トモニ三七丸ヲ疎略ニス。信長是ヲ怒テ、元亀二年ノ正月、神戸夫婦ノ人々、為年礼、江州日野ニ（16ウ）趣クトキ、忽両人ヲ捕ヘテ隠居サセシメ、蒲生家ニアツケ玉フ。古書ニ曰ク、夫一決シテ猶豫スルトキハ、ワサハイ来ルコトスミヤカナリ。此トキ神戸分ニ検地ヲ入、神戸士ノ領知ヲ減シテ尾州士ニ玉フ。依之、神戸侍百廿人、牢人ス。其後、高田孫左衛門尉ニ命シテ、神戸ノ城ニ於テ高岡ノ城主山路弾正忠ヲ誅セラル。彼父正幽ハ、神戸楽三ノ聟ナリ。コノユヘニ弾正忠兄弟、皆楽三ノ孫ナリ。弾正忠舎弟、川木九之丞、山路弥右衛門両人ヲモ誅センカタメ、宿所ヘ討手ヲ向ラル。シカレトモ、両人敵ノ中ヲ押ヤフリ退ク。諸人コレヲ感ス。高岡ノ城ヲ、同小嶋兵部少輔ニ被下。然シテ尾州士、神戸士ト不快ナレハ、神戸ノ与力、堀内、川西、同家人、高田、岡田、其外ノ諸士、都合四百八十人一味シテ三七丸ニ仕フ。コレヲ神戸四百八十人衆ト号ス。

私ノ評。神戸ノ城、織田三七郎信孝居城ハ、永禄十二年時分也。享保五年中ハ石川近江守、禄一万七千石也。但四代以来石川家ノ居（17オ）城ナリ。

長嶋発向之事

同年五月織田信長卿、江州、濃州、尾州三ヶ国ノ諸侍、五万余騎ヲ引具シ、長嶋ニ発向シ玉フ。津嶋口、中筋口、西美濃、多芸口ニ分ケテ、嶋々ニセメ入、悉ク放火シ、諸勢ヲ納レ玉フトキ、コレニシタカヒツク柴田修理亮勝家以下、合戦ヲハケム。コノトキ一揆等キヒシクキホヒ掛、濃州ノ住人、氏家常陸入道ト全ヲ討取ケレハ、味方ツキニ敗走ス。（本ノマヽ）

信雄ノ祝言。御本所北畠信意卿、茶筌丸ヲ養子トシ、舟江ノ薬師寺ニスヘヲキ玉ヒシカ、既ニ三年ヲヘテ、元亀二年ノ夏、御本所具教卿ノ

御娘ヲ則我妹聟ニ養ヒ、茶箋丸ノ内室ニ被定。舟江ニ於テ祝言事調畢リ、其後、茶箋丸信雄ヲ大河内ノ城ニウツサル。

三瀬ノ御所之事　（17ウ）

其後、国司中納言具教卿ハ、城ヲ多気郡三瀬谷ニタテラレ、ソノ城ニウツリ玉フ故ニ、三瀬ノ御所ト云。此谷ハ、宮川ノ上ニアリテ、大杉山ニソビヘテ、シン〳〵タル山中ナリ。則太神宮ノ奥ノ院ト号シテ、又佐陀ノ御前ノ宮アリ。紀州牟婁郡熊野戸津川、大和ノ国吉野川上ニツ、イテ、ケンナンサカシキコトヒルイナシ。若天下ノ大乱ノオリニハ、国司、此山ニ忍入レンタメニ、カネテヨリ用意セラル也。

織田公君達元服之事

元亀三年、信長卿ノ子息、濃州岐阜ノ城ニ於テ元服シ玉フ。嫡男奇妙丸ヲ秋田城之介信忠ト号ス。生年十六歳。次男茶箋丸ヲ北畠三介信雄ト号ス。生年十五歳。三男三七丸ヲ神戸三七郎信孝ト号ス。生年十五歳也。君達各成長ニヨツテ、弥以テ織田信長ノ武威カ、ヤキ、諸家ノ人々是ヲウラヤム。　（18オ）

多気具教卿御謀反之事

元亀四年正月、甲斐ノ武田大膳大夫晴信入道信玄、武威ヲ東国ニ振ヒ、天下ノ権ヲトラント欲シテ、遠州味方ノ原マテセメノホル所ニ、三瀬御所ト武田入道ト一味ノ所ソンアリ。依之、ヒソカニ鳥屋尾石見守ヲ使トシテ、コノセツ思ヒ立テ旨趣ヲツケ送ル。同年三月、又国司使者ヲ以テ、是非信玄上国ニオヰテハ、迎ノ舟ヲ進ヘキトノ由也。サレトモ信玄入道ハ俄ニ病気ツノリ、運命可レ期仕方ツキ、病死シケレハ、両度ノ使者、無益事也。

私ノ評。武田信玄ハ清和源氏也。世ニ曽我五郎時宗ノ再来ト称ス。誕生ノセツ、左ノ掌中ニ一通ノ書ヲ握リ生ル也。日本中奥ノ名将、享保五庚子年、子孫甲斐ノ国ニ有之由、武田越前守コト也。禄五千五百石被下。信玄ノ軍歌、　（18ウ）

ウカ〳〵ト夜ヲヌル武士ハナマフシヨ夜ヲヌルモノハ用ニタヽヌソ

ラウ〳〵トネムレル武士ハナマフシヨマムシナラテハ人ハサヽヌソ

サレハ武田入道ノコト、甲陽軍鑑諸書ニノス。コヽニ略ス。

関盛信勘気之事

其頃、関盛信ハ勘気ヲ蒙リ、日野ノ蒲生家ニ預ケラル。是ハ先年、六角家ニ為二一味一、シハラク敵対イタシ、信孝ヲカロシメケルニ由テ、今如此。シカル間、亀山分ノ新城以下、信孝ニ付玉フ。関家ノ与力、宇野部、萩洲、同家人、井上、高橋、楠、岩間、其外ノ諸侍、或ハ三七信孝ヘ仕ヘ、或ハ浪人トナル。其内ニ葉若九郎右衛門尉ハ、関家ノ忠臣タリ。此ユヘニ日野ニ至、薪ヲヒロヒ水ヲ汲ミ、ヒトリ忠ヲハケマスユヘ、人是ヲホム。

私ノ評。忠臣二君二不レ仕、貞女二夫二不レ見トハ、先葉若ノ忠信ハ義士ノ忠ト云也。夫、世間ニハ人心定リカタシ。当世ハヱリノ世界也。昔ノナニ（19オ）氏ヨリ今ハヱリ也ト云々。

足利義昭朝臣将軍補任之事

足利義昭、信長ノ武威ヲカリテ将軍職ニ任シ、世ヲ治ラル、コト数年ナリ。然トモ其人、武将ノ器ニアラス、甚貪欲ノ大将ナリ。タトヘハ可罰輩ヲモ、賄賂ヲアムガタメ是ヲ宥メ、或ハ宥ヘキ者ナレトモ、ソノ財宝ヲウハヽンタメニ是ヲ罰ス。皆以非道ノ沙汰ノミ多シ。古書ニ曰、夫主君タル人、欲ニ傾キテ何ソ世ヲ治ンヤト云々。信長ハ、カノ行跡ヲヲモフテ是ヲ考ミテ、シハ〳〵ノ諫言ヲ上ラル、処ニ、必闇主ハ諫ヲ嫌ヒ讒ヲ信スルナラヒナレハ、還テ信長ノ諫ヲ悪ミ、公方義昭、元亀四年四月、謀書ヲメグラシ、織田信長ヲ亡サントス。信長、速ニ上京シ一戦ニ及フ。公方忽ニ軍利ヲ失ヒ、シキリニ和談ヲ乞玉フ。信長、君臣ノ礼ヲ重ンシ、其心ニ応シ事速ニナル。然ルニ義昭、早報情ヲ忘レ、同年七月、密謀ヲ企アリ。君臣ツヰニ義絶ニ及。信長、重テ攻上ラルレハ、公方（19ウ）シハラクモサヽヘス敗軍ニ及フ。信長、猶モ是ヲ敬ヒ、一命ヲ助ケ、中国備後ノ国鞆ヘ流ケイシ畢。コヽニ至リ、足利家、尊氏将軍ヨリ十五代、永ク断絶ニ及フ。霊

陽院殿是ナリ。其後、織田信長、天下ノ政務ヲ司リ、天子ヲ以主君トシ、此年改元アリテ、天正元年ニナル。抑、我朝ハ君子国也。第一皇家ヲ恐、下民ヲアハレムヲ以道トス。信長公コヽニ叶テ礼節ヲ糺シ、ツキニ四海ヲ掌ノ内ニ入玉フ。

長嶋出勢之事

天正元年九（本ノマヽ）月、平信長公、数万ノ軍勢ヲ以、北伊勢長嶋ニ発向シ、急ニ攻玉フ。此トキ江州勢、西別所ノ要害ヲヤフル。柴田勝家、滝川一益、片岡ノ城ヲヤフル。信長公、勢ヲ入玉フ時、一揆等シタヒ来リ、林新三郎ヲ討トリケレハ、味方シハラク敗軍ス。同七月、信長公、信忠卿父子、都合六万余騎ヲ催シ、長嶋ニ発馬シ、セメヤブラント、数日ヲ重テ在陣アリ。同九月中頃（20オ）ニ至リ、一揆悉ク滅亡ス。然トモ同廿九日、一揆没落ノトキ、織田大隈守ヲ先トシテ、宗徒ノ一族十四人討死ス。此トキ北畠三介信雄、神戸三七郎信孝ハ、大島ノ城ヲ責ラル。峯八郎四郎、鹿伏兎六郎四郎、討死ス。関ノ四郎、蒲生家ニ相伴ナハレ討死ス。蒲生父子ハ、柴田勝家カ加勢トシテ、大トリノ城ヲ責シトキ、蒲生忠三郎氏郷、若年ニシテ無比類働シ、大敵ノ真中ヘ割テ入、大剛ノ勇士ヲ組討ニシテ首ヲ取、信長ノ実検ニ入奉リ、大将信長公、見玉ヒアザ笑ヒテ、サラニ悦ノ気色ナシ。ヤヽ暫有テ、忠三郎ニ向、宣フハ、凡勝負ハ時ノ運ニヨルナレハ、兼テハカラサル所也、夫高名ハ武士ノ本意ナカラ、時ノ品ニヨルヘシ、今汝カ高名ハ、軽率ノフルマヒ也、一方ノ大将タラン人、更ニ好ヘカラス、身ノアヤウキヲカヘリミサルハ、サノミ将ノ功ト云ヘカラス、向後此コトハヲ忘レナ、ト仰ラル。蒲生ヲ始、諸軍伺公ノ大名、一同ニ感伏ス。長嶋ノ城ヲ、滝川一益ヲ召テ被下、諸軍勢ヲ入玉フ。又長嶋ノ落人多ク所々ニテ討コロサル。爰ニ（20ウ）長嶋ノ敗士トモ、南方法蔵寺ノ城ニタテコモル。信雄ヨリ、舟江ノ本田方ニ下知有テ、舟江衆多勢ヲ以、悉ク討亡ス。峯八郎四郎、子ナシ、舎弟与八郎ニ小知ヲアタヘ、峯ノ城ヲ岡本太郎右衛門尉ニ給ル。則与力ノ山尾、堀内、同家人、下井、大久保以下ノ士、是ニシタカフ。鹿伏兎モ若クシテ子ナシ。其家老鹿伏兎左京亮、坂隼人佐、コレヲ訴ケレハ、領知減少シ、伯父鹿伏兎左京亮ニ給フ也。

私ノ評。岡本太郎右衛門尉ハ、後下野守ニナル。津家中岡本五郎左衛門ハ、此岡本ノ子孫也。了義院殿ノ節、家中系図書御取ノ節、下野守ノ代ノ記録ヲ出ス。

越前国発向之事

天正三年八月、織田信長公御父子、北国ヲ御退治トシテ越前ノ国ヘ下向アリ。一向宗ノ僧徒輩亡シ玉フ。此節、勢州ノ四家各御供奉シケル。（21オ）何モ分取高名マチ〳〵也。

田丸家督。同年九月、信長公、北畠三介信雄ヲ右中将ニ任セシメ、北畠信意ヲ左中将ニ任セシメ、隠居ナサシメ、大河内ノ城ヲ田丸ニウツシ、同年ノ冬、信雄ヲ田丸ノ城ニウツシ、北畠ノ家督ヲツキ、御本所ト号ス。其後、信雄、諸事シハイス。田丸中務少輔具直ヲ、岩手ノ城ニ移シ、父田丸ハ隠居シテ一ノ瀬御所ト号ス。信意卿モ同田丸ノ御所ニアリ。

信長公ヘ国司家ヨリ使者之事

同四年正月、国司、鳥屋尾石見守、同右近両人ヲ使者トス。年始ノ嘉儀ヲ、岐阜城ニ述ラル。信長、シハラク対面ナシ。鳥屋尾右近将監、立腹シ、此信長、我ラガ主君ニアラス、甚以無礼千万也、トツフヤキ、石見ヲ同道シテ、既ニ門外ヘ立出帰ントス。信長公ハ、両使ヲ呼カヘシ、大キニ怒ル気色ニテ、国司ノ進物共ヲ大庭ニナラベ置、何トモ物ヲノ玉ハテ、広エンニツイ立、長（21ウ）刀ヲフツテ、カノ両使ニミセツヽ、内ニ入給フ。石見守ハ此有様ヲミテ、信長、ツキニ国司ヲ亡サンコトヲ量リシルモノ也。

安土山普請之事

織田信長公、同年ノ春、諸家ヲ召命シ、近江国安土山ニ一城ヲ造ラシメ玉フ。城内ニ七重ノ殿守ヲ上ラル。是我朝ノテン守ノ始トス。神戸三七信孝、器量人ニスクレ玉フカ、金ノ旄ヲ取テ音頭ヲトリ、普請ノ場ヲイサメラル。其体甚タ都也。時ノ人、神戸信孝ノ風情ヲ今様ニ作

リウタヒ興ス。扨信長公、当城ニウツリ、近州士ヲ以、旗本ニシ玉フ。

私ノ評。此安土山ノ城、石田治部少輔乱ノ節、城破却ス。岐阜ノ城モ同断破却ス。

岐阜ノ城ハ、秋田城之介信忠ニツカハシ、濃州士ヲアマタ付玉フ。

長嶋篭城之事　（22オ）

同年ノ夏、勢州渡会郡赤羽ノ庄、赤羽新之丞ト云者、福人ナリシカ、信雄ノ味方ニ参、今度忠ヲハケマシ、紀州熊野山ヲ取ヘシトテ、大将ヲ乞フ。信雄朝臣、加藤甚五郎ニ長島ノ城ヲ給リ、則長嶋ノ城主トナリ、熊野山ノ押ヘトシ、彼加藤ハ信雄卿ノ同朋、仙阿弥ト云テ、加藤治部左衛門カ子也。加之、織田掃部亮カ小舅タルニ依テ、此タヒ熊野山ノ押トナル。甚五郎ハ長嶋ニウツリテ後、新宮堀内安房守、武功ヲ以出世シ、是ハ奥村彦次郎カ子ナリ。此ユヘニ尾鷲、新宮、九鬼ノ一党、其外熊野侍悉蜂起シテ、三鬼ノ城ヲセム。加藤、軍利ヲ失ヒ退散シ、長嶋ニコモル。新宮、熊野勢ツ、イテセメントス。諸勢長嶋ニ加勢、篭城ス。熊野方大軍ヲ催シ、山手、舟手ニ分テセメ来ル。赤羽モイツシカ心替リシテケリ。数月防戦フト云ヘトモ、次第ニ敵強勢ニナツテ、ツヰニ長嶋責オトサル。伊勢士、散々ニ逃行中ニ、藤方慶由ノ孫、藤方刑部少輔子左門、若年ナリシカ、味方ニヲクレ落来ル。（22ウ）敵、情有テ送リ届ケリ。慶由怒テ云、汝何ノ面目アツテカ今逃カヘルソヤ、口オシクモ我名ヲ失フ者ナリ、ト以ノ外ノ気色也。此熊野山ハ、元来国司家ノ幕下ナレハ、コノタヒ具教卿ノス、メニヨリ蜂起スト、世以テコレヲ沙汰ス。

国司不快之事

三瀬御所具教入道法名不智、オモハスモ数代連綿トシテ当家ヲ押ヘテ他家ニ渡サンコトヲ悔ミ、内々信長公ト不快ナリ。依之、右中将信雄卿ヲナイカシロニス。国司、先年、信玄ト合体ノ謀叛アリシモ、此謂ナリ。サレハ随フ侍トモ、皆織田家ト不快ナリ。或時、信雄卿ノ小性、国司家ノ侍ノ屋鋪ニ入テ小鳥ヲトル。件ノ士イキドホリ、其小性ヲ打擲シ、甚面目ヲウシナフ。信雄怒テ、此旨信長公ヘツケラル。信長大ニ立腹アリ、則織田掃部亮ニ下知セラレ、不日ニ国司ヲ討ントス。直ニ下シ文ヲ給ル。其詞ニ曰、今後三瀬入道父子ラ三人トモ、并坂内入道父子ヲ速ニ誅スヘシト云々。（23オ）信雄ノハカラヒトシテ、大河内ヲ加ヘ以上六人也。諸士ニ信雄下知シ、計略ヲ廻ラシケリ。此トキ、天野佐左衛門、柘植三郎左衛門両人、田丸門外ニヲイテ、遥ニ従者ヲ退ケ、密ニ相談スルニ、下女一人側ニ有テ、始終委曲聞テ人ニカタルユヘ、普ク伝ヘシリ沙汰ス。誠ニ密言ハツ、シムヘキコト也。依之、急ニ討手ヲ催スト也。

私ノ評ニ曰、三知トテ、天シル地シル人シル、カクスコトシレヤスシ。諺ニ曰、人事イハ、目シロヲケト云リ。

国司生害之事

三瀬ノ御所ヘノ討手ニハ、藤潟ノ御所、藤方刑部少輔、奥山常陸介、其外一両人承リ向。藤方刑部ハ、為名代、其家老加留左京進、赴ケリ。各〳〵領知ノ朱印ヲ玉ハル。誓詞ヲ書ク。奥山常陸介、俄ニ心ヲヒルカヘシ、途中ニテ病ト称シ、涙ヲ押ヘテ止リヌ。残ル三人ノ討手ニハ、天正四年十一月廿五日ノ（23ウ）朝、サラヌテイニモテナシ、三瀬ノ御所ニ参着ス。翌朝、具教入道、炉ヘンニ座シ、夜着ヲ召レ、三歳ノ若公、当歳ノ若公ヲ左右ニ置、愛シ玉ヒシカ、近習佐々木四郎左衛門尉、御前ニ参、彼是出仕ノ由ヲ言上ス。国司ハ、乳人ヲ召レ、若君達ヲ召、出座有テ対面セラル。其時長野左京進、座ヲ立テ御持鎗ヲ取、突奉ル。国司ハ元来兵法ノ名人也。其鎗ヲ受留、太刀ヲ抜ントシ玉フニ、兼テ逆心ノ者、件ノ太刀ノ刃ヲ引結、堅クツメヲキケレハ、御所、手ヲムナシクシテ長野左京進ヲ見玉ヒ、我平生己等ヶ様ノ逆意ヲナサン者ト思ヒツルトテ怒玉フ。其トキ加留左京、太刀ヲ抜テ、ツヰニ国司ヲ害シ奉ル。御年四十九歳ナリ。加之、両人ノ子息達ヲモ同殺害ス。見聞ノ人々、袖ヲヌラサスト云コトナシ。アハレナル事トモナリ。

国司具教兵法之事　（24オ）

北畠国司具教卿ハ、塚原入道ト伝カ弟子ニテ、兵法ノ名人、一刀至極ヲ伝授セラル。シカレトモ、平生用心ヲツヽシマヌ人ナルユヘ、今カヽル災害ニアヒ玉フ。コヽニ中比、常陸ノ国住人飯篠入道長威ト云モノ、兵法天真之伝ヲ請、始テ一流ヲ立。世ノ人是ヲモテハヤス。カノト伝ハ、入道シテ長威カ口テンヲ継テ、秘術尤自由ヲ振マフ。新ニ又一流ヲ立、天下ニ名ヲエタル兵法者ナリ。ト伝、諸国修行シテ本国ニ帰リ、最期ニ及フ時、兵法ノ家督ヲ立ントオモヒケルカ、三人ノ子共ノ中、イツレカ然ルヘカラン、先アレラカ所存ヲアキラメン、ト云テ、嚢簾ノ上ニ木枕ヲ置、急ニ嫡子彦四郎ヲ呼ヨスル。惣領、見越之術ヲ以、カノ木枕ヲミオツケ、ヒソカニ取テ内ニ入レハ、又枕ヲサキノ如クヲキテ、次男ヲ呼。次男、ナウレンヲ上ルトキ、木枕落ケレハ、飛サツテ刀ニ手ヲカケ、謹ンテ坐ニツク。又枕ヲ前ノコトクニシテ、三男ヲ呼。三男、ナウレンヲ開トキ、枕落ケレハ、刀ヲヌキ枕ヲ（24ウ）中ニ切テ、座ニ入ル。時ニト伝、怒テ、ヤヽ汝等ハ、木枕ヲミテ驚クコトハナンソヤ、嫡子彦四郎、思慮深クシテ、アヤマタサルコソ神妙ナレ、トテ、ツヰニ兵法ノ一大事ヲユツル。只、一太刀ノ奥旨ハ、唯授一人ノ口伝也、我先年、勢州多気ニユキ、伊勢ノ国司ニサツク、汝イカニモシテ、是ヲ習ヘ、ト云終ツテ、其侭死ス。其後ニ、塚原彦四郎、勢州ニ上リ、国司ニ対面シ、我父ト伝ヨリ相伝ノ一太刀、君ニ伝ル所ト其相違ヲミクラヘン、ト云ヘハ、国司是ヲ謀トシラスシテ、大事ノ太刀ヲカル〳〵シク遣ヒミセ給フトナリ。同十一月廿五日ノアサ、田丸ニオヰテ相図ノ鐘ヲナラシ、北畠ノ一族ヲ同時ニ打コロス。先大御所ノ次男ノ長野御所、同三男式部少輔、是ハ東門院ノ児也。国司ノ聟坂内兵庫頭、三人田丸ニアリシヲ、織田ノ家人等、謀出、一人ハ生捕、二人ハ突殺ケリ。イツレカ此人々、只夢ノコトクニ消果玉フ。

私ノ評（夢ニ付テ）。天台文句ニ曰、夢者従二須陀洹一至二支仏一悉ク有レ夢、唯仏ノミ（25オ）不レ夢無レ疑無二習気一故不レ夢（三大部ノ内ニ）。

凡ッ夢ハ昼ノ妄念邪想、千緒万端ノ事、皆睡ノ中ニ想事ナリ（紀信論ニミユ）。

大河内家坂内家之事

大河内ノ御所ハ、兼テ魔法ヲ行ヒ兵法ノ名人也。折フシ病中ニテ、田丸ノ宿所ニアリケルカ、討手ノ士一両人、彼宅ニ行向テ、先ハカリテ病ヲ問。其トキ、大河内ノ家人、高木弥市右衛門、出座シテ是ヲアイサツス。討手ノ士、茶ヲ乞。高木、何トナク座ヲ立トキ、件ノ侍、大河内ニ飛カヽツテ組合。残ル一人ノ者スキマナク太刀ヲヌキ、コレヲツク。大河内、二刀サヽレテ逃ラレシヲ、ツヰニ両人掛ツケ切コロス。小性二人、居間ノ側ニ食ヲ喰テ居ケルカ、此アリサマヲミテ忽逃去ル。ソレヨリ家来共、不残宿々ヘ退クニヨツテ、世ノ人、大河内ノ家人ヲ鞘大豆ト名付笑フ。ウテハ則トブト云心也。坂内ノ御所、入道万輔ノ（25ウ）方ヘ討手ノ侍両人承リ、田丸ノ宿所ヘ向ヒシカ、坂内、サウトウヲ聞トヒトシク、家人ヲ催シ防キ戦ントス。其トキ追討使、相謀テ、坂内ノ家人ニ逆意ヲスヽメ、坂内ノ侍、当座ノナンヲノカレントテ、忽義ヲステ主人ノ首ヲ切テ出ス。此ユヘニ坂内ノ家人ヲ大豆年貢トテアサケル。打テ出スト云心ナリ。

大腹御所之事

具教卿ノ嫡子北畠左中将信意卿ヲハタハカリ出シテ、一間ナル所ヘ押コメ置。今年廿五才也。肥満シテ腹大キナルユヘ、大腹御所ト名付。御母ハ佐々木承禎ノ娘也。具教、日頃別腹ヲアイシ、本腹ヲウトミ、信意卿ノ舎弟達ハ外腹也。信意、父ノ寵ウスシト云ヘトモ、長子ト云、殊ニ信雄ノ養父タルヲ以、此タヒ一命ヲ無恙。其上孝行ノタメトテ、先滝川ニアツケラレ、懇意ヲ加ヘ玉フ。其後京ヘ上リ住居セラル。今ノ北畠親顕卿ノ親父ナリ。（26オ）悲哉、伊勢ノ国司九代相続繁昌シテ、今一朝ニ断絶ス。カクテ、波瀬、岩内ヲ始、北畠ノ一族十三人トモニ滅亡シ畢。只、田丸家一人残ル。此時田丸ノ御所父子、岩手ノ城ニアリ。サウトウヲ聞ツケ、キビシク用心ヲセラル。信雄聞召、使者モ以ナタメ玉フ。

多気具教行状記巻二終

（26ウ）

「多気具教行状記　三」（外題）
（白）

多気具教行状記巻三目録

藤方慶由入道之事
奥山常陸介之事
北畠具親之事
河股城責之事
多気谷責之事　付三瀬一味
川股退治之事
具親卿退去之事
囚人殺害之事
玉井生害之事
細野九郎右衛門之事
毛利家出張之事
九鬼大隅守出世之事
伊州発向之事
田丸焼亡之事
神戸信孝之事
雲林院家之事
伊州退治之事
滝川出世之事
信孝出世之事
明智光秀謀反之事
蒲生家篭城之事
織田信澄之事
明智日向守滅亡之事
伊州蜂起之事
滝川左近一益上国之事
家督諍論之事
同評定之事
羽柴柴田之事
信孝誕生之事
同謀叛之事
羽柴秀吉和用之事
諸家発向之事
盛信謀反之事
秀吉発向之事
峯ノ城責之事
亀山ノ城責之事
信孝出張之事
柳ヶ瀬合戦之事
柴田勝家自害之事
岐阜ノ城落人之事
信孝生害之事
滝川没落之事
秀吉出世之事

（表紙）
（見返し）
（1オ）
（2オ）

多気具教行状記巻三

藤方入道慶由之事

（1ウ）

爰ニ、藤方ノ御所慶由入道ハ、兼テヨリ人質トシテ田丸ニ居ラレケルカ、此度北畠ノ一族ノ有様ヲ見聞テ、涙ヲナカシ玉フコトナノメナラス。殊ニハ息刑部、今度不義ヲ企、国司ヲ誅ヌ。是ニヨツテ入道、刑部ニ対シ、抑去ル夏、嫡孫長嶋ノ城ヲ落テ家名ヲ失フノミナラス、今亦汝、大逆不道ヲ顕シ、悪名ヲ末代ニ残シケルコト、誠ニ主君ト云、一族ト云、心アル人、愚老命ナカラヘ、ケ様ノ無道ヲ聞ニ耳穢レ、心常ナラス、シカシ、只世ヲ早クシテ、泉下ニ至ンニハ、ト眼ヲイカラシ歯カミヲナス。刑部、対テ曰、我元本意ニアラスト云トモ、ケ様ニ人質トナツテゴザアレハ、セメテ御命ヲ助、心易カラシメンタメ、心

（2ウ）

外ノ逆意ヲ企候、ト言葉ヲ尽シテワヒケレハ、慶由重テ曰、汝カ、ル催ヲ聞ナハ、国司ヘツケ、三瀬ニオヰテ国（3オ）司トトモニ討果シ、ワカ老体ヲ磔ニカケナハ、実ノ君臣ノ面目、武士ノ本意タルヘシ、所セン只今ノ問答、サラニ益ナシ、トテ、深淵ニトヒ入テ、ツヰニ自消果ラル。誠武士ノ義心、世コソツテ異口同音ニ是ヲホム也。ハタシテ其子孫、日々落世シテ、後ニハ大津ノハタコヤシテ絶果畢。家人加留左京ハ、刑部ヲス、メ逆意ヲ企、国司ヲ奉討シカ、幾ホトナク重病ヲ受、五体四肢スクミテ死去ス。ア、末世トハ云ナカラ、因果ノ程コソアサマシケレ。

奥山常陸介之事

奥山常陸介ハ、桓武天皇ノ後胤、余五将軍ノ末葉、奥山平大夫貞兼カ流也。勢州今徳山ニ城主トシテ、数代北畠ノ幕下也。殊ニ常陸介、武芸ニ達シ、智謀フカク仁義ヲシレリ。今度織田ノ命ヲウケ、国司ノ討手トシテ、既三千貫ノ朱印ヲ給リ、堅神文ヲ書ケルカ、重代ノ主君（3ウ）ヲ討ンコトヲオソレ、サラニ天罰ノカレサル所ヲナケキ、俄ニ虚病ヲ構、朱印ヲ戻シ、夫ヨリ速ニ出家ス。国司殺害ノ後、信雄朝臣、以使奥山入道ヲ呼寄玉ヘハ、常陸三衣ヲカケテ田丸ニ至ル。信雄、其貞心ヲ感シ、当坐ニ三百貫ノ朱印ヲ給ル。奥山入道是ヲ受ス。我領地ヲイタ、キ用ナケレハ、乍恐カヘシ奉ル也、今度主人ノ滅亡、偏ニ某ノ并（本ママ）（上欄に「菩提カ」）ノタネニ御坐候由、申上、退出ス。其後、仏道堅固ニツトメ、津西来寺ノ辺リニ庵ヲムスヒテ、国司ノ後世ヲ吊ヒ、一生念仏ヲコタラスシテ、目出度往生トケニケル。誠ニ世ニアリカタキ志也。

私ノ評。一念発起菩提心未来永劫功徳無量也。タトヘハ、八万ノ金ノ宝塔ハ、破壊シテミチントナルトモ、一念ノ発起心ハ、上品上生ノ臺ナルヘシ。奥山ノ出家トナリシハ、増心ノ益サラニツキストヤ。

北畠具親之事（4オ）

コ、ニ国司具教卿ノ舎弟、南都東門院ノ院家ハ、若年ヨリ仏道修行ノ身ナリシカ、今度当家一流ノ滅亡ヲ聞テ大キニ憤リ、密ニ南都ヲ落チ、伊賀ノ国ヘ打コヘ、長木吉原方ヲ頼、シハラク旅宿ノ内ニ、ケンソクシテ、北畠具親ト名ノリ、其後忍々ニ三瀬、川股ヲ頼、多気ノ諸士ニタヨリテ、不日ニ義兵ヲアケントシ玉フ。依之、勢南譜代ノ士、アマタ同意、蜂起ス。先三瀬谷筋ニハ、栗谷、唐櫃、其外アマタノ地士、同心ス。川股士ニハ、波瀬、峯、乙栗栖ヲ始、諸家悉一味ス。長谷海道筋ニハ、菅野谷、三田、三竹等、小稔（倭）谷一族七人衆、不残味方トナル。川股谷ハ、元来東門院ノ領地ナリ。此故ニ、谷中ノ者普ク手下ニ付。シカレハ、波瀬、峯等、御院家ヲ迎ヘ、森ノ城ニ入奉。峯、森、鳥屋尾、家木等、イツレモ守護ス。織田家、カレラヲ退治ノタメ、三瀬ヲ森清十郎ニ被下、川股谷ヲ日置大膳亮ニ被下、垣内ヲ足利十兵衛尉ニ被下、城戸内蔵介ニ改メ、小稔（倭）ヲ滝川（4ウ）三郎兵衛尉、柘植三郎左衛門、長野左京進等ニ被下。イツレモ先手ヲツトム。

川股城責之事

天正五年ノ春、川股谷滝野有馬野村、鉄中ト云所ニ取出ヲ造リ、国中ヘ討出ントス。依之、信雄ヨリ滝川三郎兵衛、池尻平左衛門、天野佐左衛門、田丸中務、日置大膳等ニ命シテ是ヲ責玉フ。一日一夜相戦ヒ互ニ武勇ヲハケマス。日置、滝川、各疵ヲカウフル。其後、和タンヲ以、城ヲ明ケ引退ク。大膳亮弟、次大夫ヲ大将トシテ、同滝野、山崎等ヲセメ、次大夫、智謀ヲ以終ニ城ヲオトス。長谷海道、菅谷ノ城ニ押寄コレヲセム。谷方防戦フト云トモ、大勢ニ対シ不叶、ツヰニセメオトサル。次ニ伊勢士、三竹ノ城ニ押カケ是ヲセメ、三竹左京亮、勇威ヲハケマシ防キ戦ユヘ、良久落城セス。後ニ及テ城ヲワタス。又、桃ノ股城、沢、秋山、承、是ヲセム。三田方防キ戦ト云トモ終ニ是モセメオトサル。三瀬ハ森清十郎、調義ヲ以、三瀬左京以下コレニシタカヒ、川股ハ、日置大膳（5オ）調略ヲメクラシ、赤羽新之丞ヲ引入ル。コ、ニ大内山但馬守、熊野新宮堀内安房守ヲカタラヒ、或時、赤羽ヲハ夜ウチニス。是ヨリ、三セ谷悉ク信雄ニツク。小倭ノ一族百人ハカリ、七人衆ヲ大将トシテ諸所ニコモル。皆白山権現ノ宮司也。滝

川三郎兵衛、柘植三郎左衛門、長野左京亮、智謀ヲ以、或ハ和シ、侍共ヲ味方ニ引付ケ、自然ニ退治ス。

川股退治之事

諸方皆信雄ニ属スト云トモ、川股谷、波瀬、峯以下、川股士五十余人一味シテ、二心ナク具親ヲ守衛ス。依之、日置大膳亮兄弟、勇ヲフルイ朝タイトミ戦フ。日置次大夫、先一両日ノ内ニ閼伽樋、九曲ノ両城ヲセメオトス。其後、秋山、沢、吉野、本多、三瀬、森等加ハリテ、日置兄弟先陣ニスヽメハ、波瀬、峯ノ城ヲセム。峯家、武勇ヲハケマシ防戦スト云ヘトモ、精力ステニツキケレハ、城内ニ於テ自害ス。同峯カ舎弟、并乙栗栖両人、生捕ラル。故ニ城ツヰニセメ落（5ウ）サル。味方モ、舟江ノ森菊右衛門以下、宗徒ノ士ウチ死ス。日置カ童ニ聖丸トテ十八歳ナリシカ、大剛ノ者ニテ大ニ戦ヒ、ヨキ首アマタ打トリ、其身モ十七ヶ所痛手オヒ、既ニ絶入ントス。日置、甚タカレヲオシミ、気付トシテ百石ノ折紙ヲ出ス。傍輩カベニハリテ、カノ者ヲ呼活ケル。聖丸、マナコヲ開キ、折紙ヲミテ、判形ナシト云テカウヘヲフル。日置、弥其勇ヲカンシ、印判ヲ加フ。カノ者終ニ快気ヲエ、存命シケレハ、大膳亮重テ三百石ヲ出ス。

北畠具親退去之事

其後、日置カ加勢ノ大軍、鳥屋尾、右近ヶ城ニ押ヨセセメヤブリ、スクニ森ノ城ニ馳向フ。味方、随分威ヲフルヒ戦ト云ヘトモ、大敵ニカコマレ不叶シテ、終ニ具親、森ヲセメオトサレ、中国ニ下向シ、毛利家ヲ頼テ、備後国ニ居住セラル。森落城ノ時、家木主水佐、落人トナツテ川股山ニ退。討手、山中ヲシタヒ行ク。家木大木ノ枝ニ上ル。寄手是ヲ見付ハセ来ル。家木主水、頓テ飛下リ、多勢（6オ）ト戦、討死ス。秋山ノ士、河津江ノ新坊、是ヲ討トル。オシムヘシ〳〵。コノ主水ハ、勢州一国ノ武ヘン者也。其頃童トモノ諺ニ、長野主水ハ諷主水、家木主水ハ鑓主水、トイハレシ程ノ侍、運尽タレハゼヒナシ。カクテ日置大膳亮、川股谷悉ク退治シ、城ヲ七日市場ニカマヘテ是ヲ守ル。元来川股ハ、東門院ノ領知ナリ。此所半分ハ大和ノ内ナレトモ、日置、武功ヲ以是ヲ随シユヘニ、今伊勢ノ分領トス。

私ノ評。川股、有馬ノ先、宮ノ前ニ、往古太神宮ト和州三笠山春日大明神ト国サカヒ改ノセツ、コノ所川ヘ神明石一ツ川中ヘ打入玉ヘハ、水中ノ飛ハシリ、高見峠マテアカル。コレヨリ東ハ伊勢領、高見ヨリ西ハ大和也。其石ヲ水中ヘ入玉ヒシ所、珍敷石坂ヲ珍敷坂ト申也。

又勢州南北ノサカヒニ長嶋有。南長嶋ハ伊セ也。然トモ紀州分トナル。熊野方コレヲキリトルニヨリテ也。（6ウ）

私ノ評。此コト委曲伊勢軍記評有。

囚人殺害之事

御本所信雄卿、今度ノ囚人等ヲ害セラル。先、乙栗栖二人ヲコロシ、田引ノ某ヲ殺害シ玉フ。扨又六呂木、山副、波多瀬三人ハ、兼テヨリ舟江ノ本田方ニ預ケラル。是逆心者ナレハ死罪ニキハマリ、又中ニモ波多瀬三郎生年十五才、無双ノ容顔ナリ。信雄是ヲ惜ミ、一命ヲ助ケントノ玉フ。波多瀬承リ、辞シテ曰、此三人ハ同罪ナリ、各タスカルヘクンハ、尤忝キ御恩シヤウ也、私一人御免ニオヰテハ、生テ面目ナシ、諸トモニ害ヲカウフラン、ト云切。残両人イサメテ曰、我等共ハ老タイ也、命ヲオシミテ益ナシ、御辺ヒトリ御意ニシタカヒ、存命セヨ、ト云トモ、波多瀬コレヲ聞ス。義ヲ重ンシ、死ヲイサキヨクスル事、タメシスクナキ賢士ナリ。（7オ）

玉井生害之事

天正五年、玉井新次郎モ、信雄ニ背奉リ、謀反ノ方人タリ。北畠具親没落ノ後、父玉井兵部少輔諸共ニ、退散シテ神戸ニカヘル。信孝、家人ニ下知セラレ、二人ヲ生捕、信雄方ヘ送ラル。信雄大ニ悦、右二人ヲ櫛田川ニテ誅セラル。最期ニ至テ、父ノ兵部、子息新次郎ヲ呼テ云、今度ムホンニ与力シ、主人ノタメニ命ヲスツルハ、尤武士ノ本意也、相カマヘテ悪念ヲ残スヘカラス、ト云テ、川水ヲ以テ盃酒トナツケ、各磔ニカケラル。二人ノ者、タビノ中ニ金子ヲ入置シカ、一両日ヲヘテ大風吹ケルトキ、金ヲマロハスヲトキコヘケレハ、近ヘンノ民

人アヤシミ、件ノ死骸ヲ僉議シテ、ツヰニ其金ヲヒロヒトリ、寺僧ニワタシ仏供養イトナミ、念仏シ、懇ニ吊フト也。

細野九郎右衛門之事

天正五年二月二日、細野九郎右衛門尉モ、織田家ニ背、逆心ノ数也。信包怒テ、家人ノ宅ニヨヒ、ウタントス。細野、是ヲサツシ、カノ宅ヘ趣スシテ、直ニ篭城ス。（7ウ）舎弟トモ、イサメテ城ヲアケワタス。信包、ナヲ憤リヤマス、急ニ討手ヲサシ向ク。細野雅楽介、僧宝泉院フミト、マツテ戦死ス。三間図書、細野ト一味ニヨリ居城ニ篭、生害ス。加之、桑原伊豆守モ誅セラル。三間三郎、九郎、早ク逃サル、ナンナシ。足坂ノ三間小六ハ、免シヲカル。奥山常陸介、三間平六兵衛盛勝カ次男ナリ。

私ノ評。細野九郎右衛門ハ、一身田尭真大僧正懇意ヲウケ、伊州退去ノ時、人数五十人、一身田ヨリ送ラセラル。今ニ一身田ニ細野ノ具足、太刀一腰、長刀一枝、什物ニ有。

毛利家出張之事

天正六年五月、芸州広嶋毛利右馬頭輝元、播磨国ニ出張シテ、羽柴筑前守秀吉ト戦ヒ、依之、織田信忠卿、諸家ヲ引具シ、中国ニ下向シ玉フ。勢州四家、同ク供奉ス。同六月、滝川一益ハ、神吉ノ城ヲカコミ、七月、北畠中将信雄、（8オ）加勢有テ、ツヰニセメヤフル。同八月、帰陣ナリ。此時九鬼右馬允嘉隆ニ命シ、志州二郡ノ士、并地士ノ外ニ、矢野、江間、工藤、智積寺ヲ引具シ、大舟ヲ堺津マテ廻シ、去ル六月、九鬼ハ紀州雑賀ノ浦ニオヰテ、船軍ヲイトミ、大利ヲエ、敵方ノ兵舩アマタ切トル。信長公、御感斜ナラス。摂州野田福嶋ヲ於テ加増ノ恩地ヲ被下也。

九鬼右馬允出世之事

抑、九鬼家ハ志摩士ナリ。当国大略北畠ノ幕下ニ属ス。先祖九鬼隆義ハ、紀州熊野ヨリ志州ニ来リ、初ハ浪切ノ城ヲ守ル。入道シテ法名ヲ珍持（本ノマヽ）ト号ス。其子九鬼大和守、其子山城守、其子宮内少輔、其子弥五介カ後見シ、波切、片田ノ城ヲ守ル。当国英虞郡七人衆ト申ハ、相差方、国府ノ三浦方、甲賀ノ武田方、波切ノ九鬼方、青山方、佐治方、浜嶋方也。コヽニ九鬼、故有テ六人ト不和ニ及ヒ、孤立シテ武威ヲフルフ間、残六人一同シテ、波切ノ城ヲ攻ル。九鬼（8ウ）方、武勇ヲハケマスト云ヘトモ、大敵難レ凌、ツヰニ落城シテ、アノ津ニ引シリソク。其後、尾州ニ趣キ、滝川ニタヨリテ信長公ニ仕ヘ、去ル永禄十二年ノ秋、大河内攻ノトキ、九鬼、舟手ノ大将ヲ承、志摩ニ立コヘ、先年ノ大敵六人ヲセメシタカヘ、憤リヲ散シ、剰ヘ答志郡ニ至テ、磯部七郷ヲセメトリ、加茂五郷ヲシタカヘ、其後、武威次第ニ長シ、ツヰニ志州一国ヲ手ニ入、鳥羽ノ城ヲ守護シ、信雄ノ幕下トナル。武芸人ニスクレタルニヨツテ、出世ト、コウラシ。

私ノ評。九鬼ノ子孫九鬼大和守、禄三万六千石、摂州三田ノ城主。九鬼式部少輔、禄二万石、丹州陵部。

伊州蜂起之事

仁木伊賀守滅亡ノ後、伊州四郡ノ諸士六十六人一同シテ、俄ニ諸城ヲカマヘ、国法ヲ立、平等寺ニ会合シテ、神文ヲ以テ一決ス。イハユル、仁木、川合、柘植、福地、服部、高畑等、其外アマタ侍トモ、シルスニイトマアラス。コヽニ、名張ノ住人、（9オ）下山甲斐守ハ、信雄ニ背キ味方ニ不参。依之、御馬ヲ出サルヘシト進ム。依之、天正四年四月十七日、一万余騎ヲ引率シ、伊州ニ発向シ玉フ。南ハ名ハリ口、北ハ場尾口、両方ヨリセメ入。敵、各切所ニ待ウケ、数刻鉄炮ヲ打合、両陣悉ク討死ス。コノ国無双ノナン所ナリ。寄手利ヲ失ヒ、タヤスク責入コトハ不叶。信雄大ニ怒テ、先下山ヲトラヘ、軍勢ヲ引取ン、ト宣ヒ、長野左京亮ニ仰、カレラヲイマシメ、両所ノ軍士ヲ引入ル。名張口ノ敵、コノ由ヲミテ安カラス思ヒ、下山ヲ奪カヘサントス、シタイツク。沢但馬守、秋山右近大夫、軍後ニアリシカ、返シ合セ防キ戦ヒ、敵悉追ハラフ。又ニハ尾口ノ殿ハ、日置大膳、柘植三郎左衛門承リ、代〻（ノヽ）引上ントス。敵、透間ナク付来ル。寄手、難所ニ至テ騎馬叶ハサレハ、皆歩立ニナリ引シリソク。此トキ柘植三郎左衛門、酒興（本ノマヽ）、至ニヨツテ切所越カタク、味方ニヲクレ居タリシヲ、伊賀侍来

テ是ヲ討取ル。カクテ信長公聞召、大キニ立腹シテ宣フヤウ、凡国ヲ治ル大法、先大国ヲセメテ小国ヲカコムコトナシ、（9ウ）大敵シタカフトキハ小敵ヲノツカラナヒク、又軍ニ出テ大敵ヲ不恐、小敵ヲアナトラス、是軍道ノ常也、シカルニ、伊州ハケンナン地ヲ以テ不可責、道徳ヲホトコス時ハ（本ノマヽ）待ナハ、不責トモ可取、今度ノ損亡、ヒトヘニ信雄、若気ニヨツテ如此、ト仰ラル。信雄憤ヲ不止、下山ヲイマシメ、本田方ニアツケ玉フ。秋山カ家人、上津江ノ新坊ハ、下山カ聟ナレハ、秋山承リ、是ヲコロス。下山ハコク中ニアツテ、自ラ食ヲタチテ、居ルコト廿八日ニシテ、猶未レ死。本田是ヲアハレミ、様々ニイサメテ、食ヲスヽム。然トモ終ニ食セス、一両日ヲヘテ、舌頭ヲクヒキリ死ス。

田丸ノ城（本ノマヽ）亡ノ事

天正八年、田丸ノ御本所右中将信雄ノ同朋ニ玄智ト云者、出頭シテ金奉行トナル。シカレトモ、カノ者、奢ノ心出来テ、金ヲヌスミ、矢倉ニ火ヲハナチ、田丸ノ城焼亡ス。幾ホトナクアラハレ、信雄憤リ、玄智ヲトラヘ木ノ下ニ埋ミ、ノコキリヲ以諸人ニ首ヲヒカシメラル。古書ニ曰、ソレ、サヅカラザル宝ヲ（10オ）ネカヒ、悪逆ヲ企ツルモノハ、身ヲ亡スコト如此。コノサハキノトキ、信雄、諸事ニカヽハラス、自ラ長鑓五十本ヲ抱出テ、家人トモヲ集メ、先用心シ玉フ。世ノ人コレヲホム。ソレヨリ信雄、飯高ノ郡ニ城ヲツクリ、五重ノテン主ヲ上ケ、普請出来ノ後、松ヶ嶋ノ城ト号ス。

神戸信孝之事

神戸三七郎信孝モ、神戸ノ城ニ五重ノ殿主ヲ上ラル。信孝ハ、文武ノ達人ニテ、和歌ヲ好玉フユヘ、白子杢左衛門尉、甚出頭ス。カノ白子某ハ、武芸ノ達者、滑稽ノ利口者也。不断桜ト云諷ヲ作リ、天下ニコレヲヒロム。又ハ梨子ニ付、禅法有無ノギヲロンジ、或ハ浄土宗ノ念仏ヲ論シ、早物語ヲ作リテ座頭ニヲシユ。皆節アタリテ興有。去ル天正五年、羽柴秀吉、播州ヲ拝領セシ時、白子杢左衛門、播磨ニ至リ、ハリマナル三木赤松ヲ切ステ、羽柴ソ山ノ大木トナル（10ウ）秀吉、大ニ悦ヒ、色々モテナシ、褒美ヲアテラル。

雲林院（ウチキ）家之事

其頃、長野上野介信包モ、常々雲林院家ニ宿意アリシカトモ、雲林院出羽守カ子兵部太輔ハ、滝川カ聟トシテ、権威重クシ、依之信包、ハカリコトヲメクラシ、雲林院家老野呂五兵衛ヲ亡シ、ツキニ出羽守父子ヲ追出ス。出羽守、無詮方安土ヘ参リ、信長公ノ小性矢部善七郎ハ我聟タルニヨリ、是ヲ頼テ居住ス。信長公ヨリ小知ヲアタヘ、則城番ト仕玉フ。兵部太輔ハ、滝川家ヲ頼、シハラク時ヲ待キケルカ、後ハ秀吉公ニ仕ヘテ小知ヲ拝領ス。

伊州退治之事

同年ノ冬十月、伊州ノ住人福地某、信長公ノ味方ニ背、却テ討手ヲ乞。信長大ニ憤リ、則伊州信雄ニ玉リ、諸方ヨリセメ入。名張口ハ北畠中将（11オ）信雄、場尾口ハ滝川左近一益、ハセ向フ。長野口ハ長野上野介信包、鹿伏兎口ハ神戸三七信孝、甲賀口ハ多羅尾久左衛門入道承公、先陣ニスヽム。下口、蒲生忠三郎氏郷ムカハレ、和州口、筒井順慶、以上七口ヘ大軍各雷動シ、責入ホトニ、サシモ伊州ノ強兵、フセクヘキ手立ヲ失ヒ、何モ諸城ニ楯コモル。先一番ニ信雄、丸山ノ城ヲセメトリ玉ヘハ、滝川一益、富岡ノ城ヲセメオトシ、富岡ツキニ討死ス。具尾野ノ一城ハオチス、信孝ハ柘植ノ城ヲセメオトス。蒲生ハ土山ノ城ヲセメウコカシ、数刻鉄炮戦アリ。シカレトモ、伊州士、大敵ニ当テ手立ツキ、或ハカウサンシ、又ハ返リ忠シテ、信雄ノ幕下ニナル。信雄、最前ノ憤ヲ散シ、丸山ノ城ヲ滝川三郎兵衛雄親ニ玉ハリ、柘植ノ城ヲ池尻平左衛門ニ被下。仁木友梅ヲ取立テ、平等寺ノ城ヲ被下。其頃、川合ト云所ニ、アヤ杉ノ名木有。信雄コレヲ甚アイセラル所ニ、其家来結城源五左衛門、アヤマツテ此杉ヲ切ル。信雄大ニイカリ、結城ヲ追放ス。（11ウ）

滝川左近一益出世之事

天正十年ノ春、信長公父子、数万ノ軍勢ヲ引具シ、武田ツイトウノタメ、甲州ニ下向アリ。勢州ノ四家、供奉ス。武田四郎勝頼、其子太郎

信勝、没落シテ甲州田野ニカヽル。三月十一日、滝川押ヨセ、コレヲカコム。信雄ハ津川玄蕃ヲ以加勢トシ玉フ。滝川カ先陣、津田小平次正秀、笹岡貞右衛門、攻ヤフリ、武田父子ヲ討取。コノ時、津川左内、佐々木半右衛門、一番ニセメ入、土屋惣蔵、小見山内膳ヲ討取ル。滝川名将タルユヘニ、数度ノ軍賞（本ノマヽ）有。信長公、別テ今度ノ軍功ヲ（本ノマヽ）オコナフ。上野一国、并信州左久小縣ノ二郡ヲ下サレ、滝川一益ヲ以テ、関八州、奥羽両国ノ押ヘトシ玉フ。一益八千余人ヲ引具シ、上州厩橋ノ城ヘ入部シテ、関東ノ諸士ヲ幕下トス。

信孝出世ノ事

同年ノ夏、土佐ノ長曽我部秦元親ヨリ、信長公ヘ言上シテ、四国大将（12オ）ヲ乞フ。神戸三七郎信孝、勇将タルユヘ、四国ヲ被下、発向セラル。此トキ、神戸友盛、十二ヶ年ノ蟄居ヲ免サレテ、沢ノ城ヲ守ル。神戸ノ留守トナル。関盛信モ十年ノ春秋ヲ送リ、勘気赦免ヲ蒙ル。元来文武ノ達人ナレハ、亀山ノ城ヲ守リ、今度信孝ニツケラル。安芸守盛信、頓テ神戸、亀山、峯、国府、鹿伏兎ノ勢ヲ催シ、其外諸牢人ヲ召抱、軍士ノ着到ヲツケラルニ、都合一万五千余騎ナリ。五月上旬ニ、信孝ト同ク神戸ヲ立、十一日、摂州住吉ニ下着シテ、兵船ヲソロヘ、武具ヲ用意シ、渡海ノハカリコトヲメクラサル。

明智日向守謀反之事

其頃、羽柴秀吉ト毛利輝元ト、中国ニ於テイトミ戦フ。信長公、信忠公西国追討ノタメ諸国ニフレ廻シ、五月廿九日、京都ヘ御着有テ、諸方ノ軍勢ヲマチ玉フ。コヽニ、丹波ノ守護、明智日向守光秀、俄ニ大逆ノ謀（12ウ）叛ヲ起シ、二万余騎ヲ引具シ、同六月二日、京都ニハセ上リ、夜中ニ本能寺ニ押寄、主君信長公ヲ奉討。御年四十九歳ナリ。光秀、ソレヨリ二条ノ御所ヘ押ヤフリ、又信長ノ御子信忠ヲ討。御年廿六歳ナリ。抑、光秀ハ、元来濃州土岐家ノ氏族ナリシカ、信長公ニ仕、深ク恩ヲウケ、人トナリタル身ニテ、カヽルハカライ（ヒ）人外無道ノフルマヒ也。此トキ、京中ノサウトウ、只大山ノクツルヽカ如シ。諸人途ニマヨヒ四方ヘ退散ス。

私ノ評。明智ハ元十兵衛ト云。信長公近習ヲ勤、武恩ヲ請、次第ニ大身ト成。丹州亀山ノ城主ト成。併信長公ヲ恨コト二品アリ。信長公ヲ討奉リシハ、安田作兵衛ト云者也。織田家ヲ討、ノチニハ名ヲ替、天野源右衛門ト申。唐津ノ寺沢志摩守広高ノ家老トナル。禄八千石被下。信長公小性、森蘭丸ハ安田ヲ鑓ニテツク。蘭丸ノ子孫藤堂太守ノ家老仁右衛門尉ハ、蘭丸ノ子孫也。（13オ）

其後、明智光秀ハ、江州ヘ馳下リ、安土ノ城ヲウハヒトル。諸家多是ニ付。蒲生左京（上欄に「右兵衛」）大夫賢秀、同忠三郎氏郷両人ハ、義ヲオモンシ命ヲカロクシ、少シモ動セス、信長公ノ御臺、若君、姫君達ヲ引取、日野ノ谷ニコモル。一族ノ諸家、一千余人加勢、篭城ス。光秀ニ敵対シ、コヽニ多賀新左衛門、布施藤九郎、明智カ下知ヲウケ、和タンノタメニ日野ノ谷ニ立越。蒲生ヲイサメ和タンヲツクラフ。蒲生親子ハ、両人ノ不義ヲアサムキテ、一言ノ返答ニ及ハス。多賀、布施、イキトヲリ立帰テ、当時日野ノ城、造作ノ最中ニテ悉クナマカヘナリ、急ニセメ玉フヘシ、トスヽム。光秀、尤ト思ヒ、諸勢ヲ催シ日野ノ谷ヘ趣カントス。北畠信雄ハ、勢州ノ軍勢ヲ引具シ、鈴鹿ノ坂ヘ打出玉フ。蒲生是ニ力ヲエ、使者ヲ以加勢ヲ乞。氏郷ハ無二ノ忠信ヲアラハサンタメニ、二才ノ娘ヲ人質ニ出ス。信雄ヨロコヒ、本陣ヲ土山ニウツサル。

神戸三七信孝之事（13ウ）

四国発向ノタメトテ、泉州堺ノ浦ニ陣ヲスエラレシカ、此度ノサウトウニヨリ、味方ノ軍勢アマタ落失ヌ。残ル兵ワツカミ八十騎ハカリ也。爰ニ、織田七兵衛尉信澄、丹羽五郎左衛門長秀、摂州大坂ニ在城ス。依之、信孝、諸勢ヲ召集メ、セメ上ラントセラル時、信澄、俄ニムホンノ企アリ。彼信澄ハ、信長公ノ御舎弟、織田武蔵守信行ノ子息ナリ。父武州ノコトニ付、内々信長ヲウラミ年月ヲ送。加之、明智カ聟ナレハ、光秀、信澄一味ヲハカリ、当家ヲ亡シ、ツイテニ信孝ヲウタントノ支度ナリ。シカレトモ、運命ツキ、其家人其マニ相タント、ノヘ、不義ノカヘリ忠イタスユヘニ、同六月五日、信孝、丹羽長秀、

二ノ丸ニ押寄セメ立ル。信澄防戦ト云ヘトモ、ツキニ自害セシメ畢。生年二十五歳トナリ。

光秀滅亡之事

明智光秀ハ、神戸三七信孝発向ノ由ヲ聞届、急ニ江州ヨリセメ上リ、（14オ）青龍寺ニ庶（本ノマヽ）レ是ヲ討ントス。信孝近国ノ諸軍勢ヲ催シ、同六月十三日山崎表ニ進発シ玉フ。相伴人々ニハ、羽柴筑前守秀吉、池田紀伊守信輝、丹羽五郎左衛門長秀、堀久太郎秀治（政カ）、高山右近将監、中川瀬兵衛清秀、藤堂佐渡守高虎、各忠義ヲハケマシ猛威ヲフルフテ相戦フ。明智一戦ニカケ立ラレ敗走ス。然シテ光秀、山科コヘニ落行シヲ、土民竹鎧ヲ以ツキコロス。程ナク信雄并蒲生氏郷モ上ラレケリ。其外会合シテ、先亡君ノ御事ヲナケキ、各仏事ヲ営ミ、懇ニ奉弔。其後、諸家軍議シテ、明智カ残党悉ク退治シ、尾州清洲ニ至テ御家督ノ評定シキリ也。

伊州蜂起之事

信長公御他界ニ付、折ヲエテ伊州一揆又蜂起ス。先年ノ意趣ニヨリ、福地方ヲ追出シ、是ヲウツ。滝川ニ背、池尻ヲセメ、仁木カ城ヲ打カコム。信雄、土山在陣ノ頃、伊州ヨリ仁木入道使者ヲ以、右ノ趣言上シ、加勢ヲ乞。信雄（14ウ）同意アリ。沢源六、秋山右近、芳野宮内、天野佐左衛門、本田左京亮、真先ニカケ出ル。左右ニハ高嶋次郎左衛門、同舎弟椋（本ノマヽ）、右衛門スヽミ、前後ニハ高嶋孫兵衛、中西清次兵衛、以上五人ノ士、城中ニ乱入テ、敵ヲ八方ヘ追廻リ、イツレモ高名数ヲツクス。中ニモ高嶋孫兵衛ハ森田浄雲トワタシ合、ツキニ是ヲ討トル。其時諸勢一同ニ城ノ内ヘセメ入、思マヽニモミオトシテ、勝トキヲ上ケ火ヲ放ツ。コヽニ伊セ士各軍士引取ケリ。又滝川三郎兵衛、武威ヲフルヒ音羽ノ城ヲセメトラントスルニ、智謀武ヘンスクレ、ツキニ伊州南北ノ一揆ヲ退治ス。

滝川上国之事

一益ハ、上州厩橋ノ城ニアリシカ、信長御他界ノ旨聞届、此ヨシ関東ノ諸家ニ語ル。諸大名、其実言ヲ感シテ諸事滝川カ下知ニツク。不日ニ諸勢ヲ催シ責上ル時ニ、北条左京大夫氏政、五万余騎ノ軍兵ヲ卒シテ武州表ニ（15オ）打出、六月十八日、軍勢ヲフセ是ヲ謀ル。先三十騎ヲ出シテキヒシク戦処、滝川先陣笹岡平右衛門、津田次右衛門、スヽンテ是ヲ追カクル。其トキ北条ノ軍勢ウンカノコトクカヽリシカハ、滝川勢、利ヲ失ヒ敗走ス。津田、笹岡フミトマリ討死シ、主ノ一益ヲ退カシム。実ニ武士ノ本意ナリ。加之、勢州稲生五左衛門、南部久佐衛門、ハツクンニ鎧ヲ合、高名ス。滝川ノ次男八丸ヲ、敵三人来リ生捕引立行シカ、シハラク有テ古市九郎兵衛、此コトヲ聞付、頓テ敵ヲ追カケ、一人ヲ切コロシ一人ハ痛手ヲ負セ一人ハ追チラシ、ツキニ八丸ヲウハヒカヘル。是又無双ノ高名也。古市ハ神戸士ナリシカ、一益ヘ仕ヘ、ヶ様ノ事ノ手カラヲ顕ハシ、其後一益、万死ヲ出一生ヲタモチ、中仙道ヲヘテ勢州長嶋ヘ到着ス。

私ノ評。唐朝ニアル商人、舟ニ数百千貫ノ金銀宝物ヲツミ、余国ヘ行。海上風難ニアヒ、舟クツカヘル。コノトキ主命ヲ助ル。衆人ノ曰、数万ノ宝金銀ヲ沈メ、何ノ益カアル。主ノ曰、一命コソ宝ナレ、宝物ハ命アラハ可求ト云々。（15ウ）

家督諍論之事

天正十年ノ秋、諸家会合シテ信長公ノ御家督ヲ定メントスル。然ルニ信雄ト信孝ト諍論ニ及ヒ、落着セス。信孝ハ亡君ノ仇ヲ討玉フト云ヘトモ三男ナリ。信雄ハ敵ヲ討玉ハネトモコレ次男ナリ。諸家是非ヲワキマヘカタク、先両大将ヲ立、信雄ヲ尾州清洲ノ城ニウツシ、尾張八郡ノ諸侍、是ニ属ス。信孝ハ濃州岐阜ノ城ニウツリ、濃州八郡ノ諸士是ニ仕フ。柴田、羽柴、丹羽、池田ヲ以テ惣奉行トス。勢州松ヶ嶋ノ城ハ信雄ノ（本ノマヽ）武衛子孫津川玄蕃頭ニ給、南方ノ奉行トス。神戸ノ城ハ信孝一腹舎兄小嶋兵部少輔ニ給ル。北方ノ奉行トス。

信孝信雄家督論ノ事

同年ノ秋、諸大名清須ニ会シ評定一決ノ上、故信忠卿ノ若君、三郎丸三才ニナリ玉フヲ主君トアフキ、安土ノ城ニ移奉ル、信孝、信雄両人トシテ是ヲ守立玉ヘシト也。依之、御両人、其外ノ諸士、誓紙ヲ堅メ

人質ヲ出ス。但シ（16オ）カノ若君ハ岐阜ニ有。日ヲヘテ後、信孝サイセンノ議定ヲ用ヒ玉ハス。諸大名ヨリ、急々若公ヲスエ給ヘキヨシサイソクスト云ヘトモ、信孝ツキニ同心ナク、柴田、佐々木等ニシタシミ、ヒトヘニ天下ヲ奪ハントシ玉フ。

柴田羽柴之事

其頃、柴田修理亮勝家ト羽柴秀吉ト互ニ権ヲアラソヒケル。其根元ハ信孝ノ逆意ヨリオコル。爰ニ浅井備前守長政ノ後室小谷ノ御方ハ、信長公ノ妹君ニテ、世コゾツテタクヒナキ美女也。近キ時分ヨリ信孝ノ館ニ居玉フ。柴田勝家、羽柴秀吉共ニ是ヲ望ム。元来秀吉ハ信孝ノ近臣ナリシカ、信孝柴田ヲナツケンカタンメ、カノ後室ヲ勝家ニ給ル。此ユヘニ、秀吉ウラミフカクシテ、信孝ニソムキ、柴田ト不和ニナル。同年十月、信孝ハ羽柴ヲ召スニ不参。御書一通被下、両家ノ中ヲ和タンセシメント欲シケル。サレトモ、羽柴カツテ同心ナク、十八日返書ヲサヽケ、斎藤玄蕃允、岡本太郎右衛門尉、両人ニ対シ披露ヲトケ（16ウ）ラル。其趣曰、

信孝様、明智ヲ討給テ天下ノ誉レ取セラルヽハ、秀吉急ニ馳上リ先掛ヲ致シユヘ也。然ニ我等カ忠節ナキカコトクニナリ、余人ニ御目ヲ被掛、迷惑致候。又信孝様信雄様、御跡目御諍ヒニ依テ、御誓紙ニマカセ、信忠様ノ若公ヲ立、御両所様御守立可有之由、相定ル処ニ、信孝様御スハリ無之故、御主ニ事ヲカキ迷惑致候。ヶ様ノ通リ条々委細無憚可有御披露候。

右ノ一通、披露ノ後、信孝大ニ立腹シ、柴田ニタヨリ先秀吉ヲ討ントシ玉フ。羽柴コレヲ聞、信雄卿ヲ主君トシテ、勝家ヲ亡サントス。此ヨリ羽柴、柴田忽両頭ニ分ツト云。

信孝誕生之事

信孝ハ、眼前ニ亡君ノ敵ヲ亡スト云ヘトモ、末子トシテ天下ヲ望玉フ。其イハレ（17オ）イカニト云ニ、元来是次男也。信長公ノ御臺ハ斎藤山城入道ノ息女ノハラニ若公ナシ。嫡男信忠卿モ外腹ナリ。弘治三年誕生アリシヲ、御臺養子トシ玉フ。次男信雄ハ生駒ノ腹ニ生レ玉フ。信孝ト同年同月ニ誕生アリ。日数ハスコシ信孝サキ也。然トモ此母儀熱田神司岡本カ宿所ニアリシカハ、誕生ノ次第言上スル人ナシ。後日岡本、清洲ニ至申上ル。依之、三男トシ玉フ。岡本太郎右衛門ハ、カノ神職ノ子、信孝母方ノ叔父ナリ。抑、信孝ハ勇将タリト云ヘトモ、世道ニ暗シ。古書ニ曰、聖人ハ先ヲ不諍、アラソヒヲ好ムモノハ必亡、道徳ヲ用ル人ハ盛也、仁義ヲ専ニスルモノハ久シ。コノユヘニ聖徳上宮太子、十七ヶ憲法ヲ立テ群臣ヲ守ラシメ玉フ。先和ヲ以貴トス。是万代不易ノ法也。ツタヘキク、織田家ノ先祖小松内大臣重盛公、コノケン法ノ旨ヲサトリテ、賢明ヲ末世ニ残シ玉フトナリ。凡義心ヲタモツモノハ武士ノ本意タルヘシ。不義ヲ行フトキハ天サラニコレヲユルサス。オソルヘシツ、（17ウ）シムヘシ。

神戸信孝ムホンノ事

天正十年ノ冬、尾張中将信雄ト、美濃ノ太守信孝ト、兄弟ステニ義絶ニ及。勝家、秀吉互ニ威ヲアラソヒ、是モ両方ニ分ツ也。信孝ハ若君ニ背キ私ヲ立玉フニ付、池田紀伊守、丹羽五郎左衛門等、信孝ニ背。中ニモ丹羽ハ信孝ノ近臣タリシカ、色々謀テ頼ミ玉フト云ヘトモ、ツキニ同意セス。只信孝ノ味方ハ勝家、滝川一益、佐々成政等也。シカレトモ佐々ハ越後ニ有テ長尾景勝ト合戦ノサイ中ニテ他国ニアリ。此外勢北ノ味方ニハ、小島兵部少輔ハ神戸ノ城ヲ守リ、岡本下野守ハ峯ノ城ヲ守リ、関盛信ハ亀山ノ城ヲ守リ、国府次郎四郎ハ国府ノ城ヲ守リ、鹿伏兎左京亮ハ鹿伏兎ノ城ヲ守リ、外ニ滝川一味ノ侍トモ千草ヲ以各城ヲ守衛ス。

羽柴和ヲ用ノ事（18オ）

柴田勝家ハ、天性勇ニツノツテ徳ヲシラス。秀吉ハ、和ヲ専ラトシテ諸士ヲナツケラル。依之、諸家何モ秀吉ノ味方トナル。秀吉内々信孝ノ家人、岡本、幸田ヲカタラヒ、ムホンヲス、メラル。岡本太郎右衛門ハ秀吉ニ一味ス。幸田彦右衛門ハ信孝ノメノトナリシカ、忠義ヲ守テ同心セス。同十一月、ハカリコトヲ以テ、勝家、秀吉ト和タンス。秀吉、長浜ニ至リ玉フ。此トキ柴田カ養子伊賀守勝豊、勝家ヲ背、秀

吉ニ一味ス。是元来勝家カオイ也。然ルニ勝家実子権六出生ノ後、伊賀守ヲカロンス。当年元日、勝家カ盃酒ヲ先ツ権六ニサシ、次ニ伊賀守ヘツカハス。勝豊大ニ憤リ、ワレ猶子タリト云トモ既ニ惣領タリ、行末ノハカラヒ、此一事ヲ以オシハカル、ト云テ、終ニ秀吉ニ随フ。

諸家発向之事

同十二月上旬、羽柴筑前守秀吉、丹羽五郎左衛門長秀、池田紀伊守信輝、（18ウ）細川忠興、其外都合五万余騎ヲ催シ、信孝追討、濃州ニ発向有。当国ノ住人氏家内膳正、稲葉伊与守入道一徹以下、城々皆共ニ其理ニフクシ、信孝ニ背キ秀吉ノ味方トナル。依之、信孝力ヲ失ヒ、丹羽長秀ヲ頼、先和睦ヲ用テ諸大名ノ心ニフクシ、信忠卿ノ若君ヲ以安土ニ居奉リ、信孝ノ母堂ヲ人質ニ出シ玉フ。十六日、内々事調ヒケレハ、諸将シハラク安堵ス。廿二日、秀吉安土ニ伺公シ、若公ニ対シ御礼アリ。然間、信雄卿ヲ後見トシ、兼テ評定ノコトク、羽柴、柴田、丹羽、池田四人ヲ以テ奉行トス。若公成長ノ後、岐阜中納言秀信ト号ス。

私ノ評。此秀信卿ハ、信長公御孫ニ付、家康公ヨリ御懇意ニ付、候所、石田治部三成ニタノマレ、ツヰニ後ニウタレ玉フ。ヨシナキ悪人ニクミシ玉フニ付、左ノ如シ。委細ハ関ヶ原御陣ニ有之。

北畠具親之事

同年十二月ノ末、北畠具親、中国ヨリ勢州ニ至テ、密ニ南方譜代ノ諸侍ヲ（19オ）集メラル。安保大蔵少輔舎弟岸江大炊介、稲生雅楽介、其外数百人ノ溢者、是ニ与力シ五箇ノ笹山ニ楯コモル。同十二月卅日、大河内辺ニ打出、悉ク放火ス。此ユヘニ、明ル天正十一年正月朔日、津川玄蕃頭、田丸中務、日置大膳亮、本田以下、笹山ノ城ニ押寄、鉄炮軍有。此トキ本田ノ家臣中西帯刀討死ス。同二日ノ夜ニ至テ、具親ノ軍勢、城中ヨリ松明ヲ出シ鉄炮ヲ打。其明ル朝、並木ニ松明火縄ナドユヒ付、山ツタヒニ伊賀路ヘ引退ク。夜明、鉄炮ヲトナシ。寄手フシキニオモヒ、セメ入トモ、城内ニ人一人モナシ。下ラウ二人居タリシヲトラヘ、誅スト也。

関芸州ムホン之事

関安芸守盛信ハ、亀山ニ帰参ノ後、家督ヲ立ントス。先家臣ヲ召集メ、各異見ヲ問。葉若某申ハ、次男右兵衛尉ヲ立ント云。此人ハ足不具ニ付幼少ヨリ山門ニノホリ児トナル。岩間ハ、三男勝蔵ヲ立ントス。関家ヲ相続スル人、（19ウ）代々乳房四ツアリ。今勝蔵如斯。其頃柴田家ニアリ。盛信、葉若ト同意シ、右兵衛尉ヲ以家督ニ立、蒲生右兵衛大夫賢秀カ聟トス。此ユヘニ、葉若ハ権高ク岩間ハ威ヲ失ヘリ。コヽニ秀吉、関家ニ対シムホンヲスヽメラル。盛信返答ニ、某、蒲生ト申合候間、氏郷ノ所存次第、イカヤウトモ御意ニ可随由ヲノフ。本ヨリ蒲生父子、秀吉ト一味ナレハ、関家父子トモ同シク秀吉公ニ付。則盛信、天正十一年正月、秀吉ヘ礼トシテ葉若ヲ伴ヒ上洛ス。家臣岩間ハ、ルスヲ伺ヒ一族四十三人同意シテムホンヲ企。滝川家ニタヨリテ亀山ノ城ヲ奪ヒトリ、一益ノ勢ヲ催シ長嶋ノ城ヲ出、先岡本下野守カ抱シ峯ノ城ヲ抜トリ、滝川義大夫ヲ入置。是一益ノオイ也。滝川、亀山ノ城ヲトリ、佐治新介ヲ入置。同関ノ諸侍ヲ加入シ、鈴鹿口ノ押ヘトス。関芸州入道万鉄息右兵衛尉一政、蒲生家ニタヨリテ此旨ヲ言上ス。

秀吉発向之事　（20オ）

正月廿三日、秀吉七万余騎ヲ引具シ、滝川退治ノタメ江南ニ下向シ、軍勢ヲ三手ニ分テ、勢州ヘ押カケ玉フ。土岐多羅口ハ、舎弟羽柴美濃守秀長、筒井、伊藤掃部介、氏家左京亮、稲葉伊与守等、其勢二万五千騎也。君ヶ畑越ハ羽柴孫七郎秀次、中村孫平次一氏、堀尾茂助吉晴等、其勢二万余騎ニテハセ向フ。安楽越（ホソヽ）ハ秀吉三万余ニテ向ハル。各勇威ヲハケマシ、北伊勢ニセメ入テ諸方ヲ放火シ乱放ス。秀吉ハ桑名ニ本陣ヲスエラル。

峯ノ城之事

秀吉ノ舎弟羽柴美濃守秀長、同孫七郎秀次ハ、峯ノ城ヲ攻ラル。滝川義大夫フセキ戦。信雄ノ士、津川玄蕃頭、同シク当城ヲセム。アル朝ヨセ手、抜ツレテ城ノ堀キハヘ近ク時、城中ヨリ長キヒシヤクヲ以テ

不浄ヲクミ、寄手ノ中ヘカケチラス。織田信包モ当城ヘ責ヨセラレタリシカ、信包ノ侍トモ、城近々ト歩ミユキ、我レニ俳諧ノ発句アリ、城内ノ人々心アラハ、ワキヲ付ラレヨトイヘハ、（20ウ）城ノ内ヨリ何者トハシラス、大音ヲ上ケ、各ハ定テ兼々作リ儲ケテ、今脇ヲ乞玉フナラン、某只今トン作ノ狂歌アリ、返歌ノ用意シタマヘトテ、

上野ノ焼砥ハカマニアワネトモ羽柴ヲコナス峯ノシロカナ

信包ノ侍、返答ニハタトツマリ、只鉄炮ヲ打カケタリ。

亀山城責之事

羽柴秀吉ノ先陣、亀山ノ城ヲ打カコミケル。佐治新助、爰ヲ大事ト防キ戦フ。此ニ蒲生氏郷、関父子共ニ先手ヲ承リ、同閏正月ノ末方、秀吉大軍ニテ押カケラレ、佐治大勢ニモミ立ラレ、コラエカネテ開城シテノキニケリ。秀吉、亀山領ヲ氏郷ニ給ハル。蒲生家辞退シケレハ、関右兵衛尉ニ下サレ、氏郷ノ与力トス。岩間一族悉ク降参シケレハ、則是ヲナタメ、前ノ如ニ召仕フ。次ニ関ノ新城ノ攻手、関安芸守入道万鉄、木村隼人正、前野庄右衛門尉長康、一柳市介直末、山岡美作守、野崎新之允、青地四郎左衛門尉ハセ向テ押カ、（21オ）リ、ツヰニ城ヲモミヤフル。二月八日、秀吉長ハマニ至リ玉フ。没落ノ後ニ万鉄ノ隠居所トス。

信孝出張之事

同三月、信孝ムホンヲ発シ、氏家内膳正、稲葉伊与守分領ニ出（打カ）テ出、悉ク放火ス。秀吉大キニ怒テ、信孝ノ母公并幸田彦右衛門尉カ母、人質トシテ安土ニアリシヲ磔ニ掛ラル。コノトキ幸田カ母、息彦右方ヘ文ヲ送ル。曰、汝カ為ニ我命ヲスツルコトサラニ是ヲナケカス、親ハ必先立者也、汝相カマヘテ忠義ヲツクシ主君ニ背クコトナカレト也。皆人是ヲ感シケリ。秀吉、同四月十七日、長ハマヲ打立、大垣ニツキ、同十八日、氏家、稲葉ヲ以信孝ノ領内ヲ放火シ、取出ノ城ニ陣ヲスエラル。此トキ信孝ノメノト幸田彦右衛門兄弟、義戦ヲハケマシ討死ス。又信孝ノ士可児才蔵、木股彦三郎、大崎次郎右衛門三人、川表ニ於テ鑓ヲ合、ヒルイナキ働キ高名シテ引退ク。秀吉、岐阜城ヲセメントテ諸勢ヲ催サル。

越（上欄に「江」）州柳ヶ瀬合戦之事

（21ウ）

同年四月、柴田修理亮勝家、北ノ庄ヲ打立セメ上ル。柴田カ先陣佐久間玄蕃允、同廿八日、志津ヶ嶽ニ於テ合戦ヲイトナミ、秀吉ノ先手中川清秀ヲ討トル。秀吉ツヽイテ大軍ヲ催シ、大垣ヲ立、柳ヶ瀬ニ向ハル。廿一日、江越ノ境ニ出、柴田、羽柴合戦ニ及フ。柴田カ先陣忽打負、佐久間玄蕃一戦ニ敗北ス。勝家旗本クツレアヤウキ所、免（上欄に「毛」）受庄助、馬印ヲ玉リ、勝家ト名乗戦死ス。誠ニ武士ノ本意也。其間ニ勝家、漸北ノ庄迄オチノヒタリ。コノ戦ニ柴田ノ運命尽ヌル印アマタ有。先手ノ一方アケホノニ小松原ヲ見付テ、堀左衛門尉秀治カ軍勢ウシロヨリ遮ルト云テ逃カヽル。一方ニハ清水ヲ呑士、ヒシヤクヲウハヒ合、トツト云コエニ驚キ逃チル。其外キクハイ多シ。此勝家ハ、信長公ノ第一ノ名臣、天下ノ諸人ニウヤマハレテ、鬼柴田トイハレシホトノ勇士ナレトモ、武ウン尽ヌレハ如此。廿二日、秀吉、北ノ庄ノ城ヲセメ玉フ。柴田軍勢悉ク落ウセ、剰ヘ柴田権六并ニ佐久間玄蕃生捕ラル。（22オ）秀吉是ヲ誅セラル。同廿四日、勝家小谷ノ御方ヲ害シ、ツヰニ其身モ自殺ス。生年五十八才也。抑、勝家ハ、眼瞳剛ニシテミル所ヲアサムキ、耳臆ニシテ聞コトヲ恐ル。秀吉ハ、眼瞳ニシテ見ル所ヲ恐レ、耳剛ニシテ聞コトヲアサムク。コヽヲ以テ柴田常ニ秀吉ヲアナトルコト法ニスキタリ。羽柴是ヲ憤リ、時節ヲ待テ亡サント心ニコメテ年月ヲ送リ玉ヒシカ、ツヰニ秀吉、武ウンツヨキユヘ、柴田滅亡シタマフ。

岐阜ノ城落人之事并信孝生害之事

岐阜ノ城ハ、氏家、稲葉以下ノ諸勢、是ヲ押ヘ戦ハントス。柴田滅亡ニヨツテ、美濃、伊勢両国ノ味方悉ムホンヲ企、城ヲ退。信孝ノ家臣岡本下野守、兼テヨリ逆心シ、幸田彦右衛門義ヲ守テ戦死ス。神戸士四百八十人ノ輩、一味同心ニ皆城ヲ退キ、勢州ヘ落来ル。堀内次郎右衛門、川西喜兵衛、山路玄蕃允、同弥太郎、太田監物、同織部、高田雅楽介、同孫右衛門、高瀬左近、村田治部丞、（22ウ）其外諸士、委

曲記スニイトマアラス。イツレモ一騎当千ノ勇士、各城ヲオチ行ケリ。信孝生害。岐阜ノ城ニハ近習、外様ノ人々、イツレモ落チリテ、残輩、太田新右衛門、小林以下、ワツカニ廿七人ナリ。カノ太田ハ、神戸侍ナリシカ、近習ノヨシミヲ忘レス一族ニ背キ、此節義ヲ守ルコト尤勇士ノ本意ナリ。又小林甚兵衛ハ、神戸ノ住人石塔鍛冶但馬守国介カ子也。本武家ニアラスシテ、今ノ節ニ望ミ城中ニト、マル。名ヨト云モ余リ有。信孝此上ハ是非ニ及ハス、敵ノ心ニマカセント、岐阜ノ城ヲ開キ、尾州ニ趣キ、同廿九日、野間ノ内海ニ於テ生害シ玉フ。行年廿六歳。信孝ノサイコニ於テ、昔長田庄司忠致カ、此所ニテ主君左馬頭義朝ヲ奉レ討シコトヲ思ヒ出サレ、辞世ノ歌ヲ詠シ玉フ。

ムカシヨリ主ヲウツミノ野間ナレハオハリヲマツヤハシハチクセン

太田新右衛門尉、涙ヲ押ヘテ介錯シ奉ル。哀ナリシコトトモナリ。

（23オ）

滝川没落之事

滝川伊与守一益ハ、長嶋ノ城ニ楯篭、数度合戦ヲイトム。サスカノ大将ナレトモ、当春大敵ノ為ニ北伊セ方々セメ亡サレ、其後信雄ノ軍勢是ヲカコム。柴田滅亡ニ依テ、一益軍兵悉クオチ失ケレハ、今ハトテ孤立ノ勢モツキ果タリ。秀吉和睦免許有。滝川カ一命ヲ助ケ、江州南部ニオキテ、甚忍分トシテ五千石給ハル。同義大夫、同豊前守両人モ召出サレ、各領知ヲ被下。カノ豊前守ハ、元勢州ノ住人、木股彦次郎ト云シカ、一益男色ノアイニ由テ同名ヲナノラシム。尤義フカキ士也。

羽柴秀吉出世之事

秀吉羽柴宰相平朝臣秀吉卿、武威次第ニ長シ、自然ニ信孝、勝家、一益等ヲ亡シ、其後弥諸侍ヲナツケ、武運日々ニヒラケテ、程ナク天下ヲ手ニ入ラル。彼秀吉公ハ、元尾州愛智ノ郡中村ノ住人也。若年ヨリ（23ウ）信長公ニ仕ヘ、数百ヶ度ノ武功ヲ顕ハシ、寵恩ニヨリ出世シ玉フコト、ヒトヘニ龍ノ雲ニ上ルカコトシ。天正年中、平姓ヲ改、豊臣ト号シ、其身ハ関白太政大臣ニ補任シ、応仁ノ大乱ヨリ以来、百二十年ヲヘテ、秀吉公ノ政務ニ至リ、大日本漸ク平治ス。在世ノ行状委ク諸書ニ出タルユヘ、コヽニシルサス。

私ノ評。秀吉公ノ事、太閤記委曲有。

北畠具親卒去之事

具親ハ、先年伊州ヘ退去ノ後、フカク当国ニ蟄居シ、折々伊勢ノ国ヘ立越、譜代ノ士ヲアツメ、先祖ノ家名ヲ上ケントハカル。然レトモ、時ウツリ家運次第ニオトロヘケレハ、終ニ本意ヲ達シカタシ。秀吉公世ニ至テ、北畠具親ヲ蒲生飛騨守氏郷ニアツケラレシカ、幾ホトナク、具親卒去セラレケリ。此人死去ノ後、二度当家ヲ起シ、先亡具教卿ノ憤リヲ散セント企ル人絶（24オ）果畢。悲哉々々。

勢州一志郡多気ノ住人

松枝軒柴氏忠成

寛永五年正月書写之

ト有

時ニ

享保五年歳次庚子仲冬穀旦

沙門宗阿子採三觚ヲ於二勢南ノ射和一

近田與四郎殿

（24ウ）

付記：資料の閲覧、翻刻の許可をいただきました稲垣泰一先生に、深く感謝申し上げます。